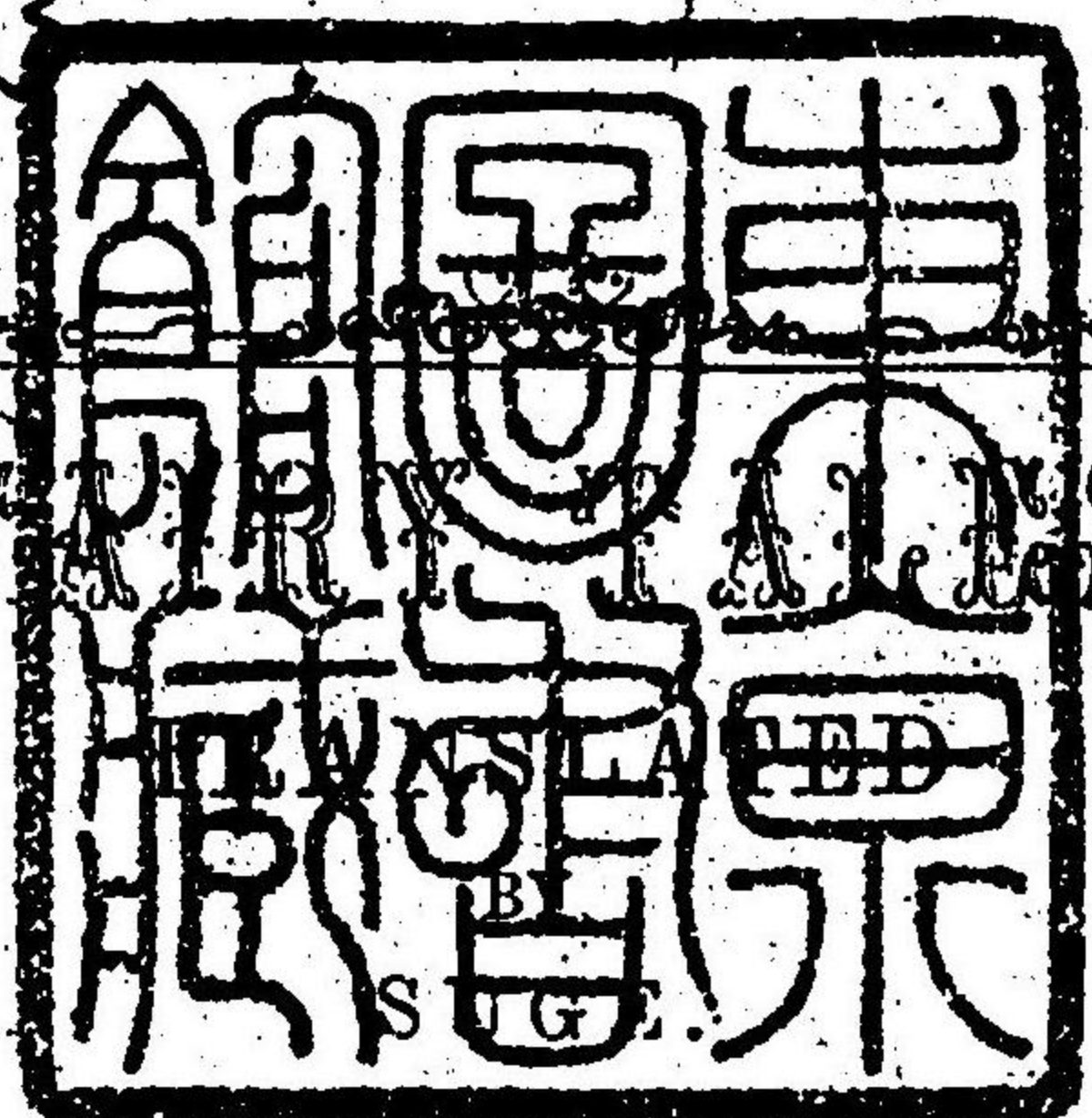


4T133



明治二十年五月五日内務省交付

桐南居士譯

古西
事洋
神
仙
叢
話

東京

集成社發兌

25
285

西洋古事
神仙叢話

目次

○仙禽を透みて公子金城に入る	一丁
○活殺自在の術	十九丁
○屢師怪を見る	三十七丁
○金城の公女	四十一丁
○十二の公女仙家に踏舞す	六十四丁
○公女メーリーの節操	七十二丁
○三公子仙窟を探くる	八十六丁
○仙子の名附祝ひ	百丁
○三綫の金髪	百四丁
	一



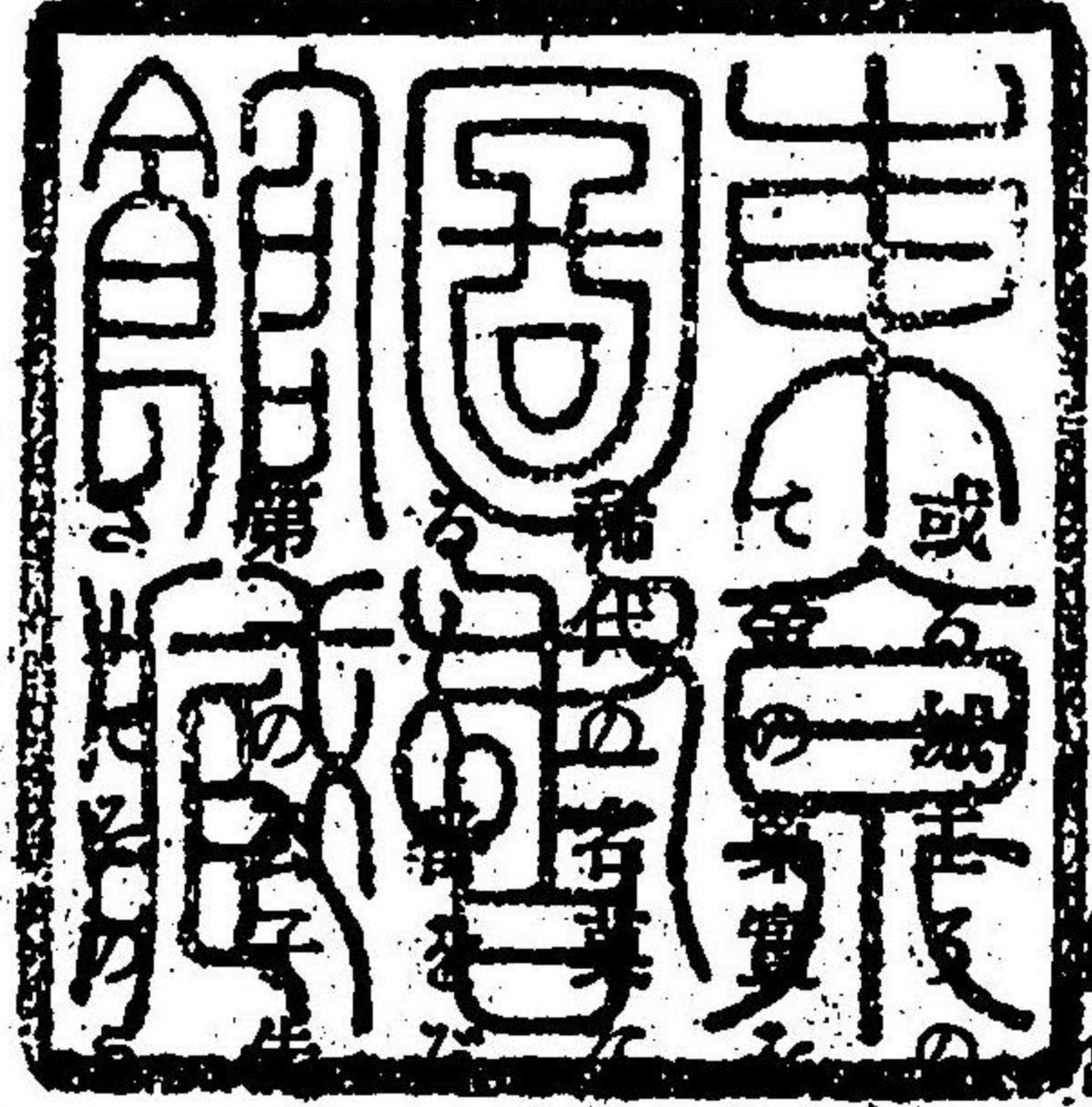
西洋古事神仙叢話目次畢

○シンデレラの奇縁

百三十三

古事神仙叢話

桐南居士譯



仙禽を逐ふて公子金城に入る

或る城まゝの城外に廣ろき花園を持ちけるがこゝに一樹の林檎あり
結びけり

稀代の奇案なれどて林檎の數を算へ三人の公子に命じて毎夜代は
させられける

つ林檎の番をつとめけるか夜のふくるころ少し眠り氣
ちに林檎ひとつ失せたりけり

第二の公子の深更まで眠らず見張りしてありしが夜明くるころ是れ
もたへがたくてまどろみ林檎またひとつ失せたり

第三の公子の年なを幼けなけれの父君もあやふと、めけるをさひて望み樹の下に立ち夜もすがら見張りけるがやがて空中より光りあり颯と羽音りて樹上にどまりたるの金色の鳥よと見るうち林檎ひとつ啄ばよはやくも飛び去らんとするところをねらひすまゝしてビストル一發はなちけれの鳥の死んで空中へ飛び去り羽ひとつ落とすける公子の落ち羽を拾ひ取り明くるを待つて父君の前へ差出たし事の子細を語りけるよ羽の金色よりてうつくし限りなけれの父君つくどあがめ此鳥生獲にしたらんに定めて希世の物ならんとて其夜待ち居けるに鳥の前夜の危難に恐れて來らず其後の絶へておとつれなり

第一の公子何とかりて其鳥を生けとり來らんとて父君に暇を乞ひあまねく野山を捜かりけるが森木の中にて狐一匹見出しけれのやがて打ち止めんとて銃のねらひ定めけるとき

狐

まばらく御免くだされ殿下かん求めの鳥の在處われら承知致候殿下にて此道真直にかん取りあそはされ日暮れ候は、其あたり二軒の人家候べし一家の美麗にして大ひなり一家の小ひさくして見苦しうらん殿下美麗なるを捨て見苦るしきをゑらびそのうち今宵やすらとせ候と、われら明朝伺候し奉らん
と云ひけるを公子深くの信せされとも奇異のおもひをなし狐をゆるし其道をいそぎけるに果して二軒の住居ありその一軒の暗らく見苦るしくて今一軒の美麗にして燈花畫の如くかゝやき音樂の聲など聞へけれの公子とからと其うちに一宿を乞ひたるにもてなしいと郎事にして美人あまたあり衣食住の美をのくせること實に人間の境界に

あらざれの公子ふゝるにうなつきこれぞと日どろの願ひなれ鳥を
得たりとて何にかせんと

城中に第一の公子歸り來らざれの第二の公子ふれを尋ね兼ねての
鳥の在所を捜さんとして立ち出て林中に狐に逢ひその言葉をさくよと
兄の公子と同一く遂に二軒の人家あるところに來り兄の公子窓より
これを見て出て迎へ共に其中の樂しみにふけりぬ

二人の公子ふまだ歸へり來ず第三の公子また暇を乞ひけれぬ

父君

おん身の年なを幼けなけれの游獵のこと極めて危ふし二人り
の子供年も智慧もたけたれいたとへ數日を経ども必らず歸へり
來るべしおん身のどまりておん待ち候へ

とてとめけるに公子道の案内搜索の計略など再々しく語りけれぬ

父君もどめ兼ねて遣りける

公子途中に狐に逢ふこと前の如くして二軒の人家あるところに到
りてついに見苦るしく小ひさなる家に入りやどりを求め翌朝之やく
起き出て野邊にて待ちけれぬ狐來りて

狐

われふれより殿下を負ふて或る城の門前まで案内致さんその城
中こそ金の鳥の在所は候また門に番兵おまた眠り居候とん殿
下それらにふゝる臆せず辭かに殿中に忍ひ入りくまなく捜か
て鳥の所在を求め壁に懸けたる金籠をおろしてそのうちに入れ
ひろくに持ち出て給へよ

と言ひ終りて尾の先き廣ろく延ばしけれぬ公子ふれに打ち乗り風
に御か如く之やくも城門の前より到りて狐に別れ内に入るに誤

つて番兵の頭につまづきけるが番士眼のさむるころ公子のとやく殿
中に忍ひ入りこゝかゝりこさぐり求めけるに果して鳥の所在に行き當
りぬ金鎖を以て繋きどめその傍らに金の林檎三個あり其うへに金籠
ありけり公子の願ひの容易にかかひしをよるこひこゝるのうちおか
しくてやゝ手荒らく鳥は觸れけれぬ其鳥驚ろきて一聲高く叫ひける
に殿衛眼をさましすの盜賊ありとて群かり來たり公子を捕らへきひ
しく縛めける

次の日法廷に引き出し審問の末へ陪審官その罪の重きことを証し判
事の死刑の宣告をせしける

かかるに城主これを痛としくやおもひけんまげて死刑をゆるしさて
公子に望まける

城主

世に天馬といへるものありと聞きぬかん身みれを得てわれに與

への死刑をゆるしつ金の鳥もかん身に取らせん

とありけれぬ公子のすまやかか領承なり萬死の中より一生を得て城主
の前を退りろきしがゆかで天馬の得らるへきやの公子の憂へいやま
して悄然としてありけるがたちまち前の老狐はより來り公子を慰め
ていひける

おきよく天馬の所在知りて候その城の門前まで殿下を導き奉ら
ん殿下の城中に忍ひ入り天馬の庭を捜がさせ給へそのあたりに
番士馬丁などおまた候とんるれに臆せず直ちに庭の中におん入
りあらぬ天馬を得させ玉とんことやすかるへしその傍らに金の
鞍候べしこれをばるのまゝに捨ておかるべし城までかんご
も申さん

とて長き尾延バ一けれのこれに打ち乗り風よりとやく城に到り居眠りたる番兵馬丁に眼もあてず直ちに廊の中に忍び入るゝ天馬と見へていと美しくたくましく馬立ち居けれのやがて引き出だし何氣なく傍らなる金鞍をとり打ち掛けんといけるとき天馬の一聲高く嘶きけり

番士ら驚き賊よ盗よと呼とゝりつゝ集ひ來りて公子を捕らへ幸らく縛めて法廷よ出て糺問の上死刑に處しけるがやがて城主の前に引き出たせは

城主

世よ黄金の城ありて其中に絶代の美人ありときゝぬおん身その美人を得てわれに取らせは死刑をゆるすかつ天馬をもおん身に與へん

とありて縛めを釋さけるが黄金の城いづちよ在りとも知らず風を逐ひ雲を捉むに異ならぬの公子の思案よくれてありけるがよゝゝ老狐に謀らんとてうろゝ尋ねけれともいで來ず殆んど困ト果てゝ見へけるところよ漸く老狐來たり

老狐

殿下わか言を用ひ玉とす粗忽にして事をかん破り候ゆへもとやおん暇を賜とりたく候されとこゝまておんども申上今更ら殿下のおん危急にわたりて暇を乞ひ奉らんも本意なければいざ金城までおんとも申さん殿下の城中よ忍び入り御園の木蔭にておん待ち候とゞ公女園中の温泉にゆわみせんとしてわたり近かく渡らせ候べし殿下とやく打ち寄り賺しこゝらへて伴ひ出てさせ玉へ公女兩親へ別れを告げて而るのち行かんなど仰せ候ともゆめ

かんゆるしなされずてひそかに件ひ出てさせ玉へ

とてやがて黄金の城まで公子を導きければ公子御溝を傳ひて園中に入り樹蔭を忍ひて待ちけるが玉を磨ける顔せ雪をわさむく肌へにうすき衣裳ひとへ打ち掛けて歩ゆみ出てけるが珊瑚のいさこ細まかにして痕をとめ瑠璃の池をづ淨くして影をうつす公子あわたしく立ち出てければ公女打ち駭ろき聲立てんとしけるをまた閑雅に物いひかけてつひにふかきちきりをぞ結ひける

公女の父母も暇ま乞いんといひけるを公子どもめけれども親子の別れを悲しみて雨に惱やめる花の色をしばし親守りてありけるうち殿衛等群うり出てまたも公子を縛めて城主の前に引き出す城主の公女のなげきをきし手つから縛めをときさていひける

城主

かん身を我家の夫婦とせんことわが願ふどころなりされどこゝよりひとつの願ひありわが宮殿の前に大ひなる山立ちふさがり窓よりふれに對するに遠近の風景みな隠れて見へずこれわが限りなきうらまに候かん身の方ら此山を移すうまたの此金城を高かく築きかへて山を瞰かろす程にも成し得られんか八日のうちよこの事かなとわれかん身を婿とて迎へん

公子此言をきいた、茫然としてありけるがしばらくしてあゝる取り直しこのこといづれもかなふべきにあらねど試みに山うち崩さんとて七日七夜の間た山の根はりけれども千分の一だも奏功し得ざれん今いつかれ果て、身もうこかずありけりかゝるとあるも老狐現これ來たりわれ今宵殿下に代り参らせんこれにてやそらとせ候へとて「公子を臥さしめけるが次きの晨たになれの波濤の如き連山いつの間

にか消へ失せて恰も山の如き波濤の風やみて平らき海靜かあるか如くなりける

城主とトめ一同に驚き喜ひ公子を婿と一迎へて城に入りけるが公子の久しく父母のそうそくをさかざれば公女どもも故郷へ歸へり父母の安否を問ひ來らんとて城を立ち出て老狐を尋ねさてトめ約束したる金の鳥のみとに及びけるが鳥を得るよ天馬を渡たさるべからず天馬を得るよ公女を渡たさるへりらず公女を渡たすの身を切るよりも悲しとておまた、び思案しけるが老狐の智謀よつて意を決し悠々として公女を伴ひ先つ天馬を約束しける城に到り公女を渡たしければ城主の目ざるの望まこ、にかなひ金城の美人を得たりとてやがて引き替へよ天馬を渡たしける

公子の金鞍の上に打ち乗りさて城主とトめ一同へ挨拶し一人りく

手を把りて鄭寧と相別れ最後に公女の手を把り確と抱き天馬に一鞭あて、容易く城中を立ち去りけるがやがて老狐をも携へて最初金の鳥を約束しける城に入り公女と老狐をは城外に隠くしおき公子ひとり天馬を引き約束の鳥申請けんとして中に入りければ城主喜ひ金籠のまゝ取り出して與ふるを公子腰に結ひ附けしからばおん暇を申さんどてとやくも天馬に打ち乗つてそこを立ち出て夫婦主従三人にて故郷近く還へりける程に老狐暇を乞ひて己まされり

公子

われ一生の大事を仕遂げ錦着て故郷へ還るのみなおん身のいさをしなり何にてもおん望み候へ快よく稱へ申さん

狐

われに大切の望みこそ候へ此身を一發に打ち殺るし切り放ち頭

尾處おしを異にして給とらひみよなく満足仕るべし

公子

やすきおん望まに候へども斯様のことのまのおんゆるし給と
れよ外もおん望まに候はずや

狐

この外に望み候はずかなひ難くはせんすべも侍らずいざおん別
れ申さん賤しき身のたきとして一言申上げ参らせん殿下井の
傍たもとよておんこゝろ用ひ給へまた罪人の肉などおん求めあるべか
らす

とて飛ひ去りけれの公子いたくいふかり我れ不敏なれども幼兒にあ
らず井に陥ひるの恐れあるべきやまた園内に獅虎など蓄ひ置くとい
へども未だ罪人の肉しんじを與へず智慮ある老狐にも似ぬ遺言おぼ言かなまた求

めなき老狐かなとてつふやきながらゆきけるところに人々あまた出
で来て罪囚二人縛め連れけるを公子打ちよりて見けれのあわれ自分
のとらうらなる公子其邊の人民に罪を得て刑場に赴きけるなり三人
の公子顔うちあせ悲歎の涙にむせびけるがいはらくして第三の公
子人々に尋ねて事の次第を聞きさて兄の罪を贖ひてどもに故郷へ連
れ立ちける

ころしも暑さつよく人も馬も疲れてけるが路の傍らに樹木生ひ茂り
たるところに公子兄弟立ち寄り憩ひけるうち兄なる公子すこし隔た
りたるるところにてこの處わきて涼しけれのとて呼ひけるまゝ第三
の公子近づき寄れの忽ち古井の中に擠おさおどし二人の公子の鳥と美人
と馬とを奪ひやかて故郷へ還り父君に謁し我等二人此品々を獲て候
とて弟のこと知らすと詐はりけれの父君深く二公子を賞して第三

の公子の歸りをぞ待ちける。かかるに鳥の羽色うるわしと雖も打ち一をれて一聲も囀らず馬の一草をも食はず美人のたゞ泣き沈みて物だよ言はざりけれの父君こそろのうち深く怪みけるとぞ

第三の公子の井中に陥ひり始めて老狐の遺言をさとりかなしみ悔ひてありけるがやがて老狐一人の乞食を伴ひ來り公子を救ひ揚けてさといふよう二人の公子ひそかに人を遣ひ殿下を害せんとて搜がし求め玉への此乞食と衣服を交換していかゞの容子にて故郷へかん歸り候へと教へけれの公子その言に従ひ食を乞ひつゝ城中よ入るに城主の傍らに懸けたる金籠の鳥にわかにはつり天馬勇んで嘶なき美人泣きやんで首らをあげけれの城主先づ事の子細を問ひける公女の兼ねて二人の公子におびやかされ事の子細を秘しけるが今の死を決して有りし事どもつまびらうに語りけれの城主打ち驚き且つ喜ひ城

中くまなく搜がし求め遂に第三の公子を得て後主と定め二人の公子を逐ひ遣りける

第三の公子の撰ばれて後主となり多年の憂ひ一朝に銷へ雲晴れ霧散したるこゝちして樂しく暮らしけるがさるにても老狐のこと忘れ難く行衛を搜りて今一度見まはしゝとて天馬に騎して尋ねけれの路の傍らに老狐ありて

老狐

殿下多年の辛苦空しからす後主に立せ玉ふ上のわが願ひ足りて候みの上の何卒此身を殺りてわが辛苦を救はせ給へ

とひたすら乞ひて己まざりけれの公子涙ながらに打ち放し頭尾二つに切り分けられの忽ち美しき男子と變り

男子

只今魔の封印釋けて野狐の形ちを免れ候我身の金城の後主に
て貴君の夫人のわが妹なり是より兩城の交誼を厚ふ諸共に幾
千代を樂しみ申さん

といひけれの公子喜んで手を把り城に還へりそれより兩城の主家日
々往來して親し交ひれりとる其後の消息の絶へて人間に傳はらず

活殺自在の術

或る戦争の後解役され兵士のうちに「フロリッキ」といへる者ありが
こゝろ輕々として憂苦を知らず氣象勇ましくて死を恐れざりが解
役の昨銀貨四志と鮑一個とを得てさて何にう好き職業に就かんとて
旅出ちしけるが元と氣輕ろき性として小歌うたひながら悠々として往
さける途中に乞食に逢ひける

乞食

何卒れん情けを

フロリッキ

我れも貧しき兵卒の果てなれの其方と同然乞食の身なり情けを
かくるほどの身代にあらずされど我身代の四分一を汝に與へん
とて銀貨一志と鮑一片とを投して過ぎ去りしが又乞食に逢ひぬ

フロリツキ

我れも乞食同然の身なり身代三分の一を汝も分たん

とて銀一志と匏一片とを授け過ぎ往きしが又々乞食に逢ひければ

フロリツキ

我が身代を二分して汝に取らせしをこれにて我れと汝と正しく同

然の身分となり過不及の争ひなり

とて又銀一志と匏一片とを授け過ぎ行き途の傍らなる小店に憩ひて

匏の残りを出たりまた銀一志を授けて麥酒一升ばかり買ひ飲み食ひ

して立ち出てけるが一人の兵士に出逢ひぬ

兵士

我れの「ピートル」と云ふ兵士なるが近頃解役されて未だ職業を得

ず大兄辨當あらい我れに分たれよ

フロリツキ

我れも今朝ほど解役され銀貨少許と匏とを得たれとも途にて乞

食に與へ四分の一ばかり残りたるを只今腹中へ奉納したれの最

早何もな—大兄と共に乞食して如何のものにや

ピートル

されば同行すへ—まかり我れの醫術を覺へたれの乞食するに及

ふま—大兄我れに従ひ來らぬ面白きこと多かるべし

フロリツキ

その妙なり近頃の好新聞なり

とて同行しけるが路傍の家より婦人の泣聲きよへければ二人立ち寄りて子細を聞くに婦人戸を開らき

婦人

妾の所夫おつて只今過あやまちして足を打ち折り氣息いきまも掩たぐ々たぐになりけれの如
何せんと途方に暮れて候

ビートル

そのかん痛のいきことなり我れ幸ひ外科の妙術に達して候へば
苦るゝからすの治療して參らせん

とて内に入り背囊ナツアサツより膏藥取り出たゝ病人の痛處に貼して
呪文の如き詞葉唱へけれの負傷まづの忽ち愈へて元との如く復しけるに
夫婦の大ひに喜ひ何か謝禮參らせんと謂ひけるをビートル固く辭いみ
て立ち出てけれの夫婦それにての本意ほんいなりとて小羊一頭差し出しけ
るに

フロリッキ小聲にてビートルに向ひ
食物の現に入用なれぬれを請け取り往かん

ビートル

いや〜謝禮受けての妙ならずされと大兄は〜くの擔にひ行くべ
といひけるにフロリッキ小羊うけどり荷にひ歩るきゝが腹も減り肩も痛
みけれの小羊料理して晚餐に當てんと發議しけるにビートル同意し
て

ビートル

我れの此邊に少ゝ用向われの〜と走り往きて還らん大兄の小羊
料理して我か歸るを待ち給へ

とて別れける後どにフロリッキ羊を割き炙物あぶりものとして待ち居けるにビー
トル還へらず腹の痛く減りて炙物の美うまく熱しけれの心臓のところ少
ゝ割きて試みけるが餘り美うまけれの舌を鼓して又少ゝ賞味し恰も心臓

丈^だけ食ひ盡しけるどころへビートル歸へり

ビートル

我れの餘り羊肉好まされの大兄一人にて食し給へされど心臓丈
け我れに與へ給へ

といふにフロリッキ頻りに心臓を搜がし求むれども二つも三つも心臓
の有るべき理^はなけれの見當らす

フロリッキ

此羊の心臓持たざりしと見へたり

ビートル

大兄我れに先立て賞味したるに非すや

フロリッキ

いや／＼左にわらす元來羊に心臓無き筈なりを求め搜がせ

一の愚の至りに非すや

といひけれバビートル打ち笑ひ然ることもあるべしとて其夜の其處
に露宿し明くれの前の如く同道して互ひに口軽く相罵りて行きける
が雨餘^{あま}よて溪水高く漲りてけれ

フロリッキ

大兄の長脚^{ながあし}なれの先つ渡り給へ

といふにビートル股引高く褰^あけて打ち渉るを見て

フロリッキ

是れの意外に淺し膝の上にも至らず是れの意外に淺し

とて股引褰けて渉りけるが水のフロリッキの胸まで及ひけれの驚るさ

フロリッキ

大兄應援して給えれ

ピートル向ふの岸より

救ひ參らせんされど羊の心臓の大兄食したるに相違あるま

フロリッキ

いや然にわらず早く應援して給え

といふうち水のフロリッキの首及びけるゆへ泳ぎ始めしが身に衣服
纏ひ背囊の外にも少許の荷物ありて進退自由ならず新たに漲りたる
溪水の勢ひに壓せられて已てに危ふくなりけれ

フロリッキ

應援頼むく心臓のことの後にて語るべ

といひけれのピートル救ひ上げて心臓のみどを詰りけるに

フロリッキ

されの羊の心臓を持たず我れの無きものを食とす

と答へけるにピートル打ち笑ひ猶同行去けるうちに或る城主の一女
疾ひに臥し已てに危篤のよし聞こへけれ

フロリッキ

それの面白し我等兄弟が出世の好機會なり大兄急ぎ往きて彼の

妙術施こし給へ

といふにピートルの頓着せず緩々として日を費やしけるうち公女の
醫藥の効なくて卒去せるよし聞へけるゆへ

フロリッキ

大兄の無神經なるに時日費へて徒ら出世の道絶へたり

とて不平を鳴らせば

ピートル

我れの活殺自在の妙術を得たれの死せる公女にても活かし與ふ

ペー

フロリッキ

その妙々早く其術を試み給へ

とて二人の急ぎ城に入り活殺自在の術士なりと披露しければやがて殿中へ導かれけるにピートルの公女の打ち臥したる傍らに行き侍臣に命じて熱湯を執らせ大ひなる金盥の中に瀉き公女の死体を沐浴せしめ呪文唱へければ死者の蘇生して元どの如くなりけるに城主とトめ夢かどとかり驚ろき喜ひさて謝禮の爲何にても望まに應せんといりけるをピートル固く辭して立ち出つれの城主本意なく思ひフロリッキの背囊に黄金を納れ溢れ出つる迄に盛り上げて門外まで送りける二人の城を出て、一里ばかり往きけるとき

フロリッキ

大兄堅く謝禮を辭みたるゆへ城主の本意なく思ひ我が背囊に黄金盛りて與へけるを固辭したれども聽かず誠に已むことを得ずみ、まで負ひ來れり分配しての如何

ピートル

その迷惑の至りなれども最早せんすべなければ分配のこと然るべし

とてピートル手つから其金を三分しけるに

フロリッキ

二分して然るへし何故三分し給ふや

ピートル

一分の我れ一分の大兄一分の心臓賞味したる人を搜がして與へんと思ふなり

フロリッキ

その面白くその心臓食ひたる人の此フロリッキ大將軍なり

ピートル

いや、金の分配に及ばず羊に心臓無くと聞きたり

フロリッキ

その大ひなる間違なり羊に心臓無くての叶はずそれを賞味し
たるの此フロリッキなり

といひければピートル大ひと笑ひ大將軍の白狀聞きたれこれにて
満足なり金の悉く大兄に取らすべし我れの是れより獨行すべしとて
立ち別れければフロリッキ金を得て大に喜びそれより馬に乗り車に乗
り大ひなる旅館に宿すなどして金の悉く遣ひ盡くし元との兵卒とな
りて行きけるが又或る一城の公女疾ひに罹り卒去せりと聞へければ

フロリッキひとり喜び城に入り活殺自在の術士なりと披露しければや
がて殿中に導かれ侍臣に命じて熱湯を執らせ金盤に瀉し公女の死体
を沐浴させて聞き覺へたる呪文唱へけれども死者の蘇へらすこの仕
損したりと改めて呪文を唱へ四五度に及ひけれども其驗無ければ城
主とじめ欺かれたりとして大に憤ほり已にフロリッキを詰らんとぞける
ところへピートル入り來り改めて呪文唱へければ死体の忽ち息吹返
へしけるに一同大に喜び謝禮せんと乞ひけるにピートル固辭して去
りければ本意なりとして黄金取り出たりフロリッキの背囊に盛り門外ま
で送り出てける二人の城を出て、一里許り往きけるとき

ピートル

活殺の術の兄等の能くするところに非すまた學ひ得へきことに
もあらずそれを獨り試さんとするの實に命ち知らずの白痴と聞

ふべし此後の決して斯様の拙藝を演すべからず我れの是より兄に別れて再度面會のときあるまじ

フロリッキ

我れ大ひに過てり此後の堅く戒め慎まん

ピートル

兄背囊に黄金を得たれどもまた立ちどころに遣ひ果たさんも我か戒めを堅く守らば其背囊に非常の力を附し危急の時の用も供せん

といひければフロリッキあまたび謝して堅く誓ひて別れまた馬に車も乗り乞食に與へ宏大なる旅館に宿して金の悉く遣ひ盡くし元との兵卒となりて旅行せけるが日暮れて傍らなる小さい旅宿に入り其夜の貴客餘多宿し玉への宿叶のトとして拒まれける

フロリッキ

貴顯の客ならば彼所の城中などに宿すべし失敬なれども此小屋に宿るべき筈なりその全く我れを拒むの口實なるべし

旅宿の主人

かゝるの城中に毎夜怪物出で、人を惱やめ候ゆへ住む人なり今夜我宿の貴客も彼所に宿らんとて來たり給ひしなれとも其言さして速かき我宿に來らせ候

フロリッキ

怪物どの妙なり我れ今夜彼所に宿し其物を見届けん

主人

貴君の勇まじきかん武士に候へんとやめ申さんこと失敬なれどもこれまで彼城に宿りたる人々にて生きて歸り候もの一人りる

なす其儀の思ひと、まらせ候へ

フロリッキ

さることも有らぬ猶更妙なりいざ是より参らん

主人

然らぬ御膳進め参らせん

とて内へ導きければフロリッキの麥酒一升ほども飲み肉をよき程に食してやがて古城に入りて高射して臥しける

十二時過くる頃大ひなる物音して大地震動まければフロリッキ眼を覺まし打ち詠むるよ丈け一尺ばかりの男子九人程躍り出で飛び廻りけるが足音すさまじく地に響きける

フロリッキ

汝等躍らんと欲せぬ自由も躍るべしされど我傍らに近づき安眠

を妨ぐへからず

といひければ怪物の益々フロリッキに近づき枕邊まで躍りけるゆへフロリッキ重ねて前の如く言ひければ怪物いよ／＼近づき果ては頭足の區別なく蹂躪けるにフロリッキ大に怒り怪物ども一揉に揉み殺るさんどて起つて闘ひけるが怪物の力飽まで強よく且つ多勢なりければフロリッキ最早支へ兼ねやがて背囊の口開らけは怪物の皆其中に吸ひ込まれけるフロリッキ打ち笑はずぐは囊口を閉ぢて傍らに投げ置き再び睡りに就きけるが夜明けて人々尋ね來たればフロリッキの無事に休らひ居たり

人々

怪物の消息の如何な候や

フロリッキ

怪物の悉く生け捕りて此中に在り

とて背囊を示せし人々恐れて近つかざりしが餘りに不審なれど打ち寄りて背囊を舉ぐるに重さ數百斤ありけりフロリッキの之れを荷ひそのところ立ち出で鍛冶を尋ねて大ひなる鐵槌よて打たせければ怪物ハ苦聲を揚げて潰れ死しけるフロリッキ囊口を開らさ死屍を取り出たしけるに八人迄の挫つけて死し一人生き残りて忽ち飛ひ去りけるぞ

履師怪を見る

こゝに一人の履師ありけるが不幸の事打ち續きて頗る貧困に陥ひり晝夜之げみ勉めて履縫ひけれども負債多く重さなりて容易に償ひ果つへしと思えれず今の資本も盡きて纒かよ皮革一枚残りしければ之を絶ちて履一足分として卓上に置き其夜の痛く疲れてければ明朝縫こんとて打ち臥しぬえかる次の朝に至り卓上を見れば履の見事な仕立て上げて其縫目も眼に見へぬ程に巧みに調ひ居ければ訝かりながら店頭に出し置きけるにやがて價ひ好く賣れにけりさて其夜も更るまで仕事きて寝ぬるとき革絶ちて履二足分を卓上に置きけるが翌朝に至りまた見事に調ひ居ければ大ひに訝かりながら其履賣りて更らに好き革求めこれを絶ちて四足分ほど其夜卓上に置きけるが翌朝に至りまた調ひ居ること前日の如くかくて數週間も

打ち續きける程に履師の圖らす好き助手得て餘多の利益を收め今の負債も悉く償ひ果たし裕かに暮らしけるが餘りに不思議の事をもなりとて或る日妻に向ひ

履師

毎夜吾家に来りて好き助け與ふる人の如何なる人にてまた何故にかく我等の爲に働らさけるよや實に不思議の至りなれ今宵の窃かよ身を隠くして容子見届けばやと思ふなり

と云ひけれの妻も其儀然るべしとて其夜も常の如く革絶ちて卓におき蠟燭を照らしさて室の隅に衣服など垂れ下ろして夫婦の其中に忍び息ひそめて待ち居けるが十二時過く頃に至り何地より飛ひ入りけん小さいなる男二人來りて卓の傍らに坐し絶ちたる革とりて縫ひ始めしが其迅速なること人間の所業と覺へずやがて數足の履縫ひ畢と

り戸の隙間より逃げ去りしが其男の裸体赤脚にてありける夫婦の此体を見て猶不審晴れずされど恩人に相違無けれの如何して其厚意を謝せやと計りけるが

妻

此男達寒中に裸体赤脚にての寒からん小さいさき衣服縫ひて參らせん

夫

我れの小さいさき履縫ひて參らせん

それより奇麗なるシャツ、ウエイストコート、イザニングコートなど新らしく仕立て小さいさき履二足縫ひてこれを卓上に置き前夜の如く室隅に夫婦身を隠くして待ち居けるがやがて二人の小丈夫入り來り車上を見るに革の在らざれの少く怪むたる氣色なりしが其衣服打ち

着て履をこき喜ひ勇んで躍りけるが暫らくして立ち去り其後のまた
来ずなりけるとぞ

金城の公女

或る城主疾ひ篤ふして命ち旦夕に迫まりぬるとき無二の忠臣「シヨシ」
といへるを召させて枕邊ちかく寄ひ呼せ

城主

「シヨシ」よ其方つねく丹精を抽んで忠義を盡くし信實を全ふす
る段まことに辱けなく末頼母く存するぞやわれ世を去りて後
ち一子「シヨシ」のこと其方に託する間だわれに仕ゆる心をもつ
て「シヨシ」に仕へて忠義を盡くし且が一子を受する心をもつて
「シヨシ」を愛し信實を全ふし呉れよくれくも頼ま入るぞや
「シヨシ」

この勿体なき仰せなるかな不才の微臣いかで大事の御用に稱
申すへきや去りながら累代厚き御恩を兼り今辱けなき仰せを承

とり候ことよき面目に存候萬一にも殿下不諱のおんこと候
とも骨を碎たき身を粉よして若君へ仕へ參らする決心のはゞ御
賢察を賜とりおんこゝろやそらとせ給これ

城主

われ世を捨てたらん其方後主を導きて殿中の諸室の勿論倉庫
馬廄に至るまで一々に案内して後主にまめすならん其節こゝろ
して園中の藏秘殿のみ遣こし置くべいかの殿中には黄金城の
公女の肖像を秘め置きたれの後主一見せば戀愛の情やみがたく
て種々の危険を侵かり由々き大事よおよばんもさかり難し其
方よく辨へて極めて油断なせそ

と云ひ畢りて城主の世に即けるおとにて忌服のことなど終とりけれ
ハ「マヨシ」の後主を導きて城中隈なく見分せんとして先の殿中の諸室よ
り始めてさて藏秘殿の前を過ぎけるとき「マヨシ」のふり向きもせで足
バやよ過さんとせしが後主とゞまりて

公子

此殿をも一見せん

マヨシ

いや此殿中の御一見を煩えすほどのものに候とす

公子

いや〜此一殿こそわきて美しき建物なれに決して遣こし難し
マヨシ

いや〜此一殿外部の飾りのみ美しく〜して中にも何事も候はず

公子

さにわらす其方先代の遺言によりわれに忠義盡さんと誓ひしな

がらとや我むねにさるひ我前にて物隠さんとするにあらずや
 シヨンの顔も流る、汗ぬぐひながら去り思案して詞葉を改め
 るの思ひもよらぬ仰せに候不才の微臣先君の遺命を辱ふ殿下
 へ仕へ参らせ此身を粉にして忠義の一言忘れまらざと存候ま
 かるま此藏秘殿の儀の……先君館を捐てさせ給ふとき
 遺命のすへ此殿中に極めて危険の物秘めおきたれの扉にだ
 にも觸るへからすと堅きおん戒めを蒙りあきらかに耳の底にと
 まり候を背き難くてかくいどめ参らす儀も候御遺戒に候
 への此まゝもめおかれ給これよ

公子

この心得かたし其方前さに此殿中に何事も候とすといひ今の
 危険の物秘めおかれたりといふ前後の詞葉のらぬかすまたか

る遺戒のありと思これすよー其儀ならばとき聞かせんわれ
 先君の遺命により此城の主となる上の城中の物一つとしてわれ
 の所有もあらぬなし今日の其方に案内させ我物の見分をこそ
 なすかれ其方より譲り受くるにあらず此殿中へ案内せよ
 といひければシヨンの返へす詞をもなくて首をさげすぐに藏秘殿の
 扉を開らさ己れ先つ中に入りて肖像の前に立ち塞がり隠くさんと
 まけるを公子の除けて金像を一覽しけるに相貌体格の比例かぎ
 りなく好し鼻目秀ひづといへとも優美にして不盡の愛あり口語らず
 といへとも聲有つて聞ゆるが如く手をさし出だして立ち向へる様實
 に天下の美人なりければ公子の忽ち眼くらまて其前に倒れける
 シヨンのさてころ不幸の起りけるとて泣く公子を抱き起し罪
 かたく鎖して公子を便殿も伴ひ歸へり看護してければ漸くに蘇るか

へり

公子

シヨンよ彼れの何人の肖像なるや

シヨン

先君の仰せに彼れの金城の公女とて世に恐ろしき怪物なりと承
とりて候

公子

いや〜怪物にわらず絶世の美人なりわれひと眼見しより戀愛
の情とゞめがたし凡そ世界の草木の葉みな舌と化して我か思ひ
を述ぶとも恐らくの我愛情の千分一を述べ得トシヨンよ來れよ
いざ金城の美人を尋ねん

とて立ちあがる外套の裾ひきとめて種々に諫め慰さめけれども其詮

なければシヨンこゝろのうちひとりうなづき此肖像こそ不幸の原因
されこれを打ち潰ふたらんに主君の胸の熱度も冷へなんかと工
夫して

シヨン

金城の公女を迎へ参らせんこと容易の事に候はず此肖像淳金よ
て候への打ち潰ふして土宜つちがけの品々をも造りてもちゆき候ゆか
ゝ候や

といひけるよ公子打ちうなづきやがて鍛冶に命じて金像を鑄潰くふ
種々の寶ら造らせける其間の公子もこゝろ落ち着きて見へけれハ
ヨシ喜びて日々他事を言ひ進めて打ち紛らせけるに金製の雞獅子にじし風
菓物など造りて鍛冶の公子の前に出たしけるが餘り美事に出來てけ
れのこれを絶世の美人を得るよ足るべしとて公子出立を急ぎける

ヨシも今のこれまでなりと思ひてまた諫めず此上の金城を尋ねて公女を迎へとり其上にて危難起らぬ其とき身を盡くして主君を助けぬ何の遅きことやあるべきと覺悟して船に打ちのり順風に帆かけて海上遠く向ひける

かくて數十日も帆をとりけるが四邊渺茫として霞みわたり陸地も島も見へずなりしとき霞のうちよきらくと光るもの大いさ月の如くなりしが漸く近づき見るに金城の櫓日の光りにうつりて見る眼もまばゆきばかりなれぬ主従打ち喜んでかわるゝ甲板の上に立ち眺め居けるが船のやがて其島に着きける

ヨシの身を商人に装ひ黄金の菓物猫など携へて船を出で公子をのこしてひとり城中に入りける

城門の内に廣き庭あり珊瑚の樹木生ひ茂りて異珠の菓實枝を懸して垂れその下は瑠璃の池水湛よひけるがその傍らに美人ありて玉の鹽に噴水うけて立ち居たりヨシハ黄金の猫携へつゝ傍に寄り

ヨシ

我等の海外の商人にて候寶物賣買の爲とるゝをかり越して候間よきよおん取成したのぞ入候

婦人

さにておん入候か其黄金の猫など美しき見へて候程よ公女のさそ芽出させ給えん

とて宮中へ導きければ公女の其品々を見て大いに喜びことゝく買えんと云ひけるとき

ヨシ

此品々の我れら所持のうち最に見苦きものに候

公女

此外は猶美しき品おん携へ候り

シヨソ

我れらの手代と申して商人に使とれ候ものにて主人の船中にと
ゞまり船に積み載せ候品々の其美しきこと此品に十倍まさり候
公女

其品これへもち出だしおん見せ候へ

シヨソ

仰せよ候へども船中の品々の餘りに數多かれこれへもち出さ
んは數十日をも費やすへけれは其儀平らにおんゆるし給とり公
女みづから船まで入らせ給とらる半日とかりにて事足るへし此
儀願上候

公女

さる事も候はらわらわいととり往きて見ん

船にの兼ねてシヨソの指圖に従ひ室内を掃除して待ちわびけるとこ
ろ公女入り來りて寶物一見おけるに黄金の孔雀翼を張り尾を延とし
て舞ひ出つるあり獅子の奮るひ叫ぶあり桃林檎の籃も盈るあり葡萄
の房の長く地に垂れてけるを鳥の啄むさまなど眞に逼まり造化の巧
みを奪ふばかりなれは公女の眼もこゝろもどもに奪られて詠め入り
てけるが肖像よの十倍まさりて美しくしけれは公子の魂ひも消ゆるは
どのこゝちして傍らに立ちけるがこゝど大事の場なれとて最と鄭寧
親切よもてあしけるうちシヨソの船長は指圖して錨をぬきとやく帆
かけて走りゆく

公女船の動くにこゝろ附きて甲板も出で見けるにこゝろかに島を離れ

てけれの驚ろき叫ひわれ商賈の爲に欺かれしことのくちれしよよ生
ける甲斐なしとて身を躍らせ海底さして飛べんとまけるを公子抱き
とめ

公子

我れの一城のあるトにして商賈にあらす一日おん身の肖像を見
てより慕ふてゝるの積を重さなり千尋の海も猶淺さく彼の雪
山の絶頂さへ低きと見ゆるとが胸に積もる思ひの四時の雪
解くるためしのあらざれの万里の波路を打ち越へてこゝに來つ
おん身を誘ひ参らせたれどもおん身かくまでも我れを忌み嫌ひ
玉の船戻とて還へし参らせん

といひけるに公女の少く怒り解け振り還つて詠めけるに風采氣だ
かくて威嚴を失はず鼻目麗しふりてもものいひさま優しくその真心の

面色にすぎとほりて見へけるを見捨て難くや思ひけん遂に船中よと
まりける

「マヨシ」の主家の大事首尾よくとのひけるを喜び且つ此後のこと
など打ち案して甲板の上に琵琶弾き鳴らして夕風にすゞみ居けるに
三羽の赤鳥來りて船室の上に宿り互ひに物語る

甲の鳥

金城の公女をよゝまで誘ひ出でし巧みならずや

乙の鳥

されど婚禮のことの稱ふまじ

甲の鳥

そのぬかにして

乙

此船故郷へ還らば城より栗毛の馬牽き出して濱邊まで來らん
城主打ち乗り候ハ馬の虚空をさして飛び去るべし

丙

されどそのとき傍より拳銃よて馬を射とむるものあらん城主た
すかるべし

甲

まかり此秘事ほかへ披露するものハ總身石像に化し去るべし

乙

城主の命ちたすかるとも猶婚禮のみとの叶ふまじその儀式のと
き城主金絲織の上衣打ち着玉ハ腋より火出て、總身を焼き盡
くさん

丙

されど傍より其上衣とぎ取り火中に投りたらんにハ城主たすか
るべし

甲

まかり此秘事他に披露するものハ石像に化し去らん

乙

城主の命ちたすかるとも婚禮のこと叶ふまじ儀式の夜に踏舞終
らハ新夫人疲を斃れて息絶ゆべし

丙

されど傍より夫人の肩に針して悪血三滴絞り取らハ夫人たすか
りて婚儀を全ふすべし

甲

此秘事他へ披露せんものハ石に化すべし

乙丙どもよ

されど此外又珍事多かるべし我れら化石の手より射とめらるゝことわらひ種々の危難やみて幾千とせの幸ひを享けん
 シヨンの此物語をさし身の毛よだちて寒くまばし手を組み思案しけるが確と覺悟を極めて其時を待ちけるうち船はや故郷へ還り濱邊に着さける

城より栗毛の太き馬率き來りて城主を迎へけれの逸物なりとて城主喜ひ身を躍らせて打ち乗りけるをシヨンの見すましてとやくも打ち止めたり群臣この狼籍なりとてやがてシヨンを捕らへ縛めんとまけれの城主とゞめて

城主

忠節無二のシヨンなれの深き子細も候とんそのまゝゆるしおけ

よ

主従の城に還へり婚禮の日を定めやがて其日になれの城主の金糸織の上衣打ち着て儀式又臨まんとまけるときシヨン走せ倚りて襦き取り火中に投しけれの狼籍至極なりとて群臣シヨンを捕へけるを城主おしどゞめ

城主

智慮深かきシヨンなれの是れも子細候べしゆるしおけよ

やがて廣間に於て踏舞始まりけるか暫らくして新夫人疲れて倒れけるをシヨン走せつけて抱き起し肩より血ぬき出たしけれの夫人の蘇まかへりて元との如し群臣子細を知らされのシヨンを咎め狼籍ものなりとて嚴しく縛めて法廷へ出で審問しけるよ何事をも言とざりけれの主君を蔑みする罪輕らうらすとて死刑の宣告をそなしける

五十七

城主のシヨンの無禮を憤ふると雖へども猶其舉動の合点ゆかざれり
引き出たりて

城主

其方我れを侮り無禮を加ふる段悪くさに堪へずされを深かき子
細も候の、遠慮なく我れに明かせよ

シヨン

されの此事深き子細の候

とて赤鳥の物語り委の、打ち明かりけるに其詞葉の了らざるうち
總身不仁れて石に化しける

城主打ち驚ろき且つなげき徒ら忠臣を失ひけるとして泣く、石像の
背を撫で腹を摩しけれとも動きもせず最と冷や、かなる石なりけれ
のやがて自身の室に運こばせて生けるシヨンを愛する如く晨な夕な

に撫摩してける

月日流るゝか如く過ぎ去つて夫人の玉の如き公子産みけるが健かに
育ちてはや七歳にもなりけれの城主のこれを見るにつけても自身幼
少の時よりシヨンは育たてられ、古へを想ひ出で、感涙に咽ひける
を稚き公子見て訝かしく

公子

父上の何故石像を撫て、泣かせ玉ふや

城主

是れの大事の、石像なれの餘り可愛さに涙浮かびたり

公子

われらも石像になりたく候

といひも下らざるに公子の石像に化し去りシヨンの蘇生して元との

人間となりぬ

城主の悲喜交もく、到りて笑へる顔に涙。露の如く飛ひ下たる
 此時夫人入り來り事の体を見て大ひに歎き化石の公子を抱きあげ聲
 を限りに泣き叫ひまた臥し轉ひて絶へ入りけるが主従抱き起こして
 藥をすゝめ漸やく氣附きぬれども悲んで已まず

かくて數日を過ぎけるが夫人の公子の石像を膝よあげ冷絶なる顔よ
 息して温ため頬のあたりに唇接して又うらさしわけせめて此身が
 おん身に代とらんとてまた泣き出たりけるが落つる涙雨の如く公子
 の顔に濺ぎけれの公子の立ちどころよ蘇へりけるまゝるに憐れ夫人
 の黄金の肖像と化しける

城主の公子の生きけるを見てあらうれしやと思ふまもなく夫人を失
 ひてけれの城主の歎きを想ひやるシヨンのこゝろを憐れなれ

金の肖像に始まりて金の肖像に畢とること道理あるよ似たれども枉
 げて百年の辛苦を盡くし況して主君の歎きを心かんと總身より熱く
 また冷やかなる汗流がして日々思案にぞくれける
 或る日シヨンの御園の石の上に腰打ち掛け常の如く思案してけるが
 樹の上に三羽の赤鳥とまりて

甲

いちど化石したる男こゝよ居るよ

乙

我れら其人の手に射られ

丙

其血を取りて金像よ

甲

ぬ 塗る人あらの憂きことの

乙

根元も絶へて幾千代の

丙

幸ひこゝに来るらん

と啼きけれのシヨンのやく拳銃とり出だし連發に赤羽を射落として
其血を取り金像に塗るよと見れの夫人の蘇生して元どの如くなりけ
る

また三羽の赤鳥の化して美しくき男女となり

男女

我らの曾つて此城中に仕へ參らせたるものに候魔の爲に封せら
れて飛鳥の身を受け久しく世界を飛び廻りしが只今封印とけて

本身より立ち歸へり候

といひけるにシヨン此事城主へ披露えけの城主大ひに感し厚く賞
してシヨンと共に召し抱へさて夫婦父子主従打ちそろひ一城太平を
樂しむけるとぞ

十二の公女仙家に踏舞す

或る城主十二人の公女をもちけるがまめかたちの美しく言こんか
たかく歳の少長こそあれまさりおどりなきこと、あたりも一年十二度
の満月に氣候のうとりあれども月の色に優劣なきか如し
寢室のいと廣くして十二の公女床を並へて臥し、夜の室の戸堅く鎖し
父君外より錠をおろし門をぬめらる
こゝに奇異のことこそおこれり公女おのゝうつくしき踏舞の履も
てるが毎朝やぶれうがちて恰も終夜踏舞せるもの、如しされの毎日
新らしき踏舞履買ひ入れ毎朝やぶれたるをすてさせける父君不審に
思ひて窓にも錠をおろし入口の門いよゝゝたくぬめさせ番人など
つけておさけるに履のやぶるゝこと前の如し
父君の疑ひいよゝゝ深くて遂に城外に高札を掲げそのことを披露

し誰れにても公女の踏舞を見届け来らんものあらぬ婿とて迎へて、當
主の死後に城領地をも譲らん又三夜のうちに見届け得ずの罰として
死を賜へんと有りけれの怨の深かき輩ら智慧なき族ら何の慮りもな
く、あたり命ちをおろしませず往き試みける
見届けの爲め入り来たれぬ父君よるこひもてなり衣服など與へさて
夜に入れぬ公女の寢室の入口打ち開らき其前の一室に客を案内させ
其入口も打ち開き十分に公女の舉動見認め得らるゝように萬事行き
届きてありけれの客の瞬きもせず打ち守りて居けるがやがて深更に
及ひいたく眠り氣さして堪へたくまばしまどるむうちとや夜明け
ぬれの履のやぶれたること前の如しうくて三夜を経るに何の奏効も
なければ約束の通り命ちをすてかわるゝ入り来るものみな同一お
さわひをそふまける

こゝに一人の兵士ありて戰場に傷あまたうけ役を免れて家に在りけるが武士のならひ義心に富み死をおそれずいざ試みばやとて出て立ちけるに途中に一人りの老婦ありて事によし尋ねられおれまうくにて死を侵かす秘事見届けの爲めゆくものなりと答へければ

老婦

ろの面白きことなりおん身其場よのぞきたゞよく眠りを忍び玉とゞ秘事の子細分るべしされどこのこと安すからず勇氣をふるひてゆめ油断なす玉ひそさてこの外套コウひとつもち玉へこれ隠身の服なれは大事のとき召して人知れず何地いづちまでも行き得らるべしまたこの海綿スポンジひとつ密かにたつさへ玉へとて別れける
さて城中に入り客室に通りて公女の舉動うちまもること前さの人々

の如くまけるが公女の兵士を發はなひ酒一盃をすゝめける兵士願ねがひの下に海綿をおき酒のむ真似して海綿に吸こせ酔ひたる容子して打臥うちし高らかにしてけれの公女も安堵して打ち臥しぬ
深更よ及ひぬれの公女一齊よかさわがり箆司篋など開きて目出度小袖取り出だす美しく着飾り

長女

今宵また命ち知らすの客ありて躰たき高く聞へける

少女

わらわ今宵何故か心頭こころかゝりのこと候よりに覺へて氣ふさぎ候

長女

譯けもなき事よ氣ふさぎ給ひそ今宵の客の分きて睡劑をも服し
ていたく寝入りたれぬまなくこゝろおき無く彼の地へいそぎ

申さん

とて床の下ほどくと叩けのやがて其處かち入りてきざと一通りけ
 れの長女導きしてよろこひいさめて下たりける
 兵士のるれと見るよりとやく立ちて外套打ち被ふり少女の後に従ひ
 ゆくに誤つて少女の小袖の裾踏みとめける
 少女とたど驚き聲を揚げゝるを長女なぐさめて階を下たり廣き大道
 に出つ道の並木に銀の枝葉榮へ茂けりけれのよき証據もがなとて
 兵士一枝折りて外套の隠し入るれの少女物音を聞きまた聲を揚ぐ
 るを長女打ち消して祝砲の音ならんなど慰め言ひながらゆきける
 うち道替つて金の並木生ひ茂り枝垂れ下かるを兵士また一枝手折り
 物音を消すを少女駭ろさ長女打ち消していそぎゆく程に道をや盡さ
 湖水のほとりに出つ

濱邊より十二隻の小舟をつなぎ十二人の公子待ち居てかのく公女一
 人りつゝ載せて漕ぎ出しけれの兵士も少女の後に従ひ舟に乗る

公子訝りながら

今宵の舟重くて進み難し何事か起るならん

公女こゝろに怪みながら何氣なき体にて

何事の起り候べきや今宵の天氣鮮りぬれの熱のわざよておん身

の腕重もからん

やがて彼の岸に近けり壯麗なる宮殿ろびへて内より音楽の聲ひ々く
 兵士の公女の後に従ひ宮殿に入るに殿内の裝飾うつくく實に人間
 の住居にあらずすぐに踏舞始まり公女公子雙々に打ち躍り羽衣の装
 地を拂ひ風は翻へり燈華に映するさま霞を籠めたる花の中は月さし
 風そよぎて鳥だにさへづり出だせる林のうちに深く分け入り月花

の物言ふを聞き分くるようのこゝちにて兵士もともく躍りけるが喉かわきて卓上のコップをとり月下の露かどわやうり飲みほすことわまた度たびに及ひけれの少女打ち驚ぬるを長女また打ち消して漸く踏舞果て公子送りて宮殿を出て小舟も載せて湖を渡り元どの大道に來りこゝにて相別れ翌晩を期してを歸りける

兵士歸途よの長女の傍らにつき従ひ階をのぼり寢室に近づくころかのれ先きに歸りて打ち臥しぬ

首尾よく秘事を見届けゝるが猶おどりの面白さに三夜續きて見物し第三の夜にの玉の盃ひとつ持ち去りこゝにて証據十分なれのとて父君と約束の時刻を待ち居けるが

約束の時刻來れの父君のまたも客の命ち一つ誤りかどこゝるのうち安そからすこやく案内させて事の次第を聞き糺しけるに兵士金銀

の枝葉玉の盃など隠しの中より出だし見物の次第つぶさに語りけれの父君のもどより十二の公女もいたく打驚きて歎息しぬ

かくて兵士の約束の如く城主の養子となり其迹を相續しけると云ふ

公女ノ一りの節操

或る城主十二人の公子をもちける公女一人も無かりければ打ち歎きて夫人に向ひ

城主

も一女子一人有りたらぬ十二人の男子の無くもがな
といひけるがそのうち一人の公女あま誕れければこよなく愛で慈くし
果ての公女に婿とりて相續させんとて公子を亡きものよせばやと夫
人に語りけるをき、夫人痛くこゝろを傷めける

第十二番目の公子を、ペンジャミンとて猶幼ければつねに母君の傍に
居けるが或る夜母君の物打案にて悲しげなるを見て子細を問ひけれ

夫人

父君ノ一りの公女の名を愛しておん身等を悪くませ玉への如何
なる憂きことや起り候のんと深く往末を案して夜もすがら寝も
やらす悲しみ泣くなりおん身等一と先づ此城を忍ひ出て時節を
待ちて還へり來れよ

と涙あからに語りけるを、ペンジャミン聞きてすぐ兄なる公達よ告げ
ければその猶豫なり難しとて十二人打ち連れて遠く深山の中に分け
入り柴の窟結ひて住居し兄なる十一人の公子の日々すき好める業な
りとて獵に出てゆき鳥獸類獲て還へりけるを、ペンジャミンの家に住
て料理しまた家の傍らに野菜など作りて兄弟團樂の樂しみに日を送
りけるうち早や三年の光陰を過さしけるおかるに女子の爲に我家を
逐ひ出だされしことのかへすくも口惜しければとて此後山にて女
子に逢ひ、打ち果さんと互ひに約束してける

或る日、ベンジャミン、獨り留守してありけるが美しく、き女子一人來りて柴の戸叩きければ、ベンジャミン見て、さてこそ立ち上り、拳銃携へ出て、門の戸押し開らきけるとき

女子

わらわのかん身の妹、メーリーよて候母君のかん物語り聞きて、兄上の行衛搜がさんと忍ひ出て尋ね廻りて、此深山に入りこゝまで参り候

とうれし涙に臥し沈むを、ベンジャミン見て、噫妹なるうよくこそかん入り候とて室内に案内しこゝかたのことうち語り且つ喜び且つ悲しみてありけるうち、夜黄昏れに近かければ、夕餐の用意し燈花點して待ちける折、戸外に足音して兄の公達還りければ、ベンジャミン、公女を戸柵に入れかきさて十二の兄弟うちをろひ晚餐の卓に就きけるとき

さ

ベンジャミン

我れ家に在りて今日珍らまき新聞を得て候

兄の公達

いざ語り給へ

ベンジャミン

我等一女子の爲よ憂きめ見ることの口惜さに女子に逢ひ、打ち果たさんと約しければ、も只今此約束釋きて給ひらひ新聞きかせ参らせん

兄達

よーく、只今より約束とかん

ベンジャミン起つて戸柵押し開らき、メーリーを介け出たりて事の始

末を物語れの一共に喜ひ祝盃を舉げて樂しみける

次の日より「メーリー」の兄に代りて料理其他の事を執り兄妹十三人にて一家をなす歸郷の時節をぞ待ち居けるが或る日「メーリー」家の後ろなる園より出で草花集めて遊びけるに百合花の十二房とかり咲き盛かりたるを見て兄の公達へ贈らんとて手折りて還りけるがやがて十二人の公子の化して白鳥となり大空さして飛び去りけり
「メーリー」ひとり深山の奥にのこされて草屋の竹の杖柱とたのミ公達に捨てられて落つる涙の急雨のふりすて難き名残より捨てらるゝ身のなり果てぞいと哀れの知られけり
うくて此どころ立ち出て、彷徨往きけるほどに一人の老婦に逢ひ里へ出のべき途問ひけれり

老婦

是れより人里への斯々の途なれとも程遠はけをの今夜の野宿し給ふべしそれにつけ教へ参らすへきことわりおん身今朝まだ十二の百合手折りて山盤の怒りに觸れ給ひ十二人の公達封せられて白鳥と化し去り給ひぬおん身を救えんとおぼさる七年の間た不言の戒めを保もち言はず笑はず堅く慎み給ひ魔の封印とけて復たび公達と面會の期あるべし假りにも詞葉發し給ひ由々しき大事起り候えんずるぞ篤と御思案あるべし

と語りければ「メーリー」喜ひ今より七年のあひだ不言の戒めに從えんとて堅く誓ひて別れ其夜の野宿してけるが明日松林の間に人馬の聲聽へてやがて一人の武士從者召し具して通りけるが「メーリー」の方を振り向き見て

武士

それなるの樵夫獵者の女ども覺へず何人にておん入候ぞや

メーリー黙然として答へず

武士

鼻目姿容の美麗なること凡人ども覺へず樹木の精の化して我等を欺かんと欲するもや

メーリー答へず

武士

由緒あるおん身の成果に候り

メーリー打ち首肯く

武士

我をい或る一城の主にして今日山獵に出て來りつおん身の容体を見て過き去るに忍ひず且つ不審に堪へず願く事の子細聞

かせ給これよ

メーリー答へず

城主

若る一からすの我か許へおん入り候へ介抱せしめ參らせん

メーリー首肯して謝する真似す

主従の人をメーリーを扶すけ城に還りて厚く介抱するよメーリー物言のざればまなく、啞子ありと如何なる公女の身の行末にや痛たのさかん事ありとて鄭重に待遇けるが公女の物こそ言のね心賢く學問諸藝いとよく達して花の無心にして語らざる類ひにあらす耳聰してよく人の詞葉聞き分くれの水の無情よして影を離す比ひみあらず無心の落花流水すら人を動かすまゝしてこゝろ優しきメーリーの春花の顔色秋水の眼に有るも何とか城主のこゝろの傾のざらめや無

端契さる借老の松の操の八千代古る神世も今も隔だてなり
芽出度婚禮もど、のひけるがさて城主の母君なる老夫人の初じめ、
一、二の衣服卑しげなるを見て痛く下げ、みるの後も由緒語らざる
を以ていよく、賤しき悪み城主に向ひ

老夫人

かんみの何地にて此乞食の女ひろひ得給ひ、や早く食物取らせ
て逃ひ還へし給へ

城主

某山にて此公女に逢ひ候は凡人とも覺へ候はぬ具して還へり
候へども由緒語り給はずまうし深き子細も候へけれの養ひ参ら
せて時の到るを待ち申さんと存候
かゝる問答の日ごとに絶へず公女もこゝろ憂く思ひてけるが婚禮す

みて後の老夫人の怒り益々甚だしく手荒らく新夫人をわらひ果て
の乞食女として面のあたり罵るける程に新夫人の身を切らるゝより
も苦るゝくて泣き沈み寧ろ暇乞ひて此處立ち去らんとまで思ひ定め
けるが或る日侍女をせ来りあわたしく

侍女

只今お庭の碧梧の木よ白鳥飛ひ来りて栖りけるを殿術等網打ち
掛けて生けどりて候白鳥の數の十二羽程ありて羽色雪の如く美
く、主君の御機嫌も一際に候へ疾くおん出で御覽候へ
といひけるに夫人のたとと思ひ當り轟ろく胸おし續めて打出で見る
よ鳥の大ひさと云ひ十二の數と云ひ若し我が兄の公達にもあらんか
と思へいいと、悲しくて落る涙たを押隠く、燕々鳥を詠め居けれ

城主

是れの芽出度鳥も候へのかん身はくいの進め参らせん懸るにおん蓄ひ候へ

夫人の打ち喜ひ鳥うけとりて我室へ還へりけるが鳥飼も附添ひて夫人の指圖によりいと節寧に養ひけるまかるに老夫人は是れを見て嫉さに堪へずますく新夫人をのり果ての鳥を我室へ召入れて無慘に取扱ひ半死半生に到らめて返へすなど無狀のしわざも多かりけるが遂に新夫人の過ちども虚構こしらへて離縁の事城主へ逼まりければ城主も困り果て、意を決しひろかに夫人を召し

城主

この頃の母君の怒りいよくつよくてかん身の罪咎を數へ我れに離縁のこと逼らせ給ふ程なれの強ひてとめ参らすとも若しかん身の上よいかなる憂き事の起り候とんも計り難ければいと

先の離縁と披露して此城を立出て云々の處に忍ばせ給へわれ山獵に事よせて尋ねゆき草屋まつらひて参らせ置後ちの時々訪らひ参らせんかくて時節到らぬ重ねて城中へ迎へ取るへ我が計らひを恨み給ひそ

と涙をふくみて語りけるに夫人も泣くくうけがひ暇まを取りて立ち出でけるが白鳥携へ往かんとしけるを老夫人とめて鳥の此方のものに候への城外へ持ち出ること叶ふまゝとて夫人をつき除け鳥を奪つて逐ひ遣りける

夫人の公けに所夫に捨てられ住を慣れし宮殿を逐ひ出たされ愛し鳥をも奪ひれて並居る群臣の目の前に無實の侮辱を受けながら足弱車ちからなく雲井を餘處にめぐらしてとや城門を立ち出てける後とに老夫人の鳥を取り出だし侍臣に命じて打ち殺ろさしむるに侍臣等

銃をとり打ちとめたりと見るうちに鳥の美しき公子と化し十二人の
公達並ひ立ちける

公子

我等の一城の公子と生れながら云々の子細にて城を出て山に入
りまた山靈の崇りに逢ひ飛鳥と化して候が今の封印釋けて候
とて審かに始終を物語り妹の公女の爲に城主の恩遇をも謝しけれ
城主とすめ打ち驚き早く夫人を呼び還へし引き逢せけるに夫人の
喜ひ限りなく始めて詞葉を發し打ち笑ひ互ひに有りし事とも語り合
ひうれし涙に咽ひける

城主のすぐに夫人及び十二人の公達伴ひてその城に送り返へしけれ
の父母とも恙なく十年餘り待ち詫ひてけるが我子の歸りしと聞き出
て迎へ親子の對面もすみてさて公子を以て城の相續と定め夫人の改
めて前の城は嫁しけるが老夫人の事の子細分かりて由緒正しき公女
と聞へけれの其後の懇ろに夫人を愛しいと睦ましく樂しき暮らしけ
るとぞ

三公子仙窟を探くる

或る國にゼームス、リチャード、ウヰリヤム、とて三人の公達ありしが、ゼームスも、リチャードも活潑多智にしてよく父君の意中を遊へ探ぐり父君を喜ばせ常々才器を顯わして人を驚くせけるが遊び狂るひて時と金とを費やすこと流るゝ水を見るほどにも惜まらず何にがな面白きこととして遊ばんとて智慧の有り丈を盡くして愉快を求め打ち興しける。或るに第三の公子、ウヰリヤムの性深沈より遠はき慮り有り顔色にも舉動にも顯れてけれとも欲穿くして徒らなる遊びを好まず。遊歩時間の外の城外へ出て静かに一室に坐して書を読み庭園の景色など打ち詠め言語さへ稀れに發する程の生れ附きなりければ兄なる二公子の常に嘲けり笑ひ石像と呼ひけるとそ三人の公子何れも未だ世の中の事に當りて智慧を奮ふほどの年齒に

あらされの日々遊戯を事としけるが兄の二公子の漁獵を好み演劇を好む酒を嗜み猶此外も奇を好みて何がな奇妙不思議の境界に入りに見んとて二人相謀りけるが忽ち思ひ出だす

ゼームス

リチャードよ我れと二人り深山の奥に入り仙人の住居を尋んて如何

リチャード

その面白ろからん仙窟を探つて奇々怪々の物を見聞して愉快をとり家に還つて人々語らひ何時までも面白かるべし

ゼームス

今度の石像も同伴せばや

リチャード

憶病太郎なれいとても同伴いせまじまかいたゞ何となーにかん
誘ひ候へ

とてウヰリヤムは遊歩のみと謀りけれいウヰリヤムは後園にて家鴨
蜜蜂ちりなど蓄ひて閑かに樂み居けるが此發議に同意して三人打ち
連れ春駒の健かなるは鞭むちち立ち出でける
春陽はるひの照り輝くに二里餘りも行さけれい暫らく木蔭こかげは休やすらえんとて
三人馬より下りけるが其傍らに蟻の巢ありて數千の蟻往來しけるを
見て

ゼームス

此蟻塚ちりのかま崩り崩して彼等の周章狼狽するを一見せばや

リチャード

蟻ども卵子を運び兵糧を運び或ひは戦争を始むるなと最と面白

き見物ならん

ウヰリヤム

罪無き小蟲を許るし給へ彼等の塚かまを崩さるゝは我等の城を毀た
るゝも同一かるべし

ウヰリヤムの反對説に二公子も同意して再び駒に策を進みけるが
邊りに蜂の巢のあるを見て

ゼームス

此蜂の巢打ち毀り置き駒に鞭ち逃げ延びんこと如何

リチャード

蜂の女王を生け捕るも好らん

ウヰリヤム

彼等が太平を樂しむも我等が無事を祝するも大小の異ひあれ

ども其事のよく似て候への許るさせ給へ

ゼームスの發論も廢案に歸してけれの三度歩を進めて往きける程に
途の傍らに池ありて家鴨あまた泳ぎけるをゼームス見て

ゼームス

群がる家鴨の中へ一發して驚るかまめんか

リチャード

或るひの連發に打ちとめんも好からん

ウヰリヤム

徒らなる惡戯に候我等の身分にて家鴨射とめて何にのせんされ
ど強ひておん望みならの紙玉にて發し給へ

とて虚銃二三打打ち放ち馳せ進まけるが圖らず深林の中に分け入り
古木立ち並ひて天日を蔽ひ榛莽茂けりて道だに分かずなりけれの兄

の二公子の初めの勇氣にも似ず躊躇して見へければ

ウヰリヤム

最早運動も十分なれば直ちに引返へし申さん

ゼームス

このまゝ引揚ぐるも少し口惜しきようは覺ゆ

リチャード

今少し進まん

とて徐々に進み居けるがやがて廣ろき車道に出でければ勇氣を鼓し
て其道を進みゆくに打ち開らけたる野邊あり景氣晴れ渡り花木簇々
開きて香氣人を襲ひ百鳥の啼つる聲の數千の音楽を一時に奏するが
如くなるに三人の公達大ひに喜ひ妙と呼び怪と號ひて馬より下り柳
條に繫ぎて泉を斟と落花打ち交りたるまゝ、駒に飲ませてさて振り向

き見けるも美麗なる古城有りて門外に美人兩三人遊び居ければ公達
進み近づき

公達

我等の云々と呼ぶる、城主の子息にて候が今日遠遊を試み候序
圖らず此處に來りて候抑も此處の何と申して城主の何と呼ぶる
、おん方にて候や

女子

妾の此城中に生れ育ちて候へとも此地の他より何と稱へ候か城
主の何とおん名のり候か一向存不申候

公達

おん身の城中に生れ育ちて他人へ御面會のことも無ければ城主
のおん名知り給ふぬも道理に候さるも何と呼ぶる、おん方
にて候り我等聞かまほしく存候

女子

妾一寸聞きて參らん

とて内へ入りければやがて案内者と思しきもの出て來り鄧寧に會釋
して城中へ導きけるに公子の導かれて殿中を一見するに金銀珠玉を
彫ばめて彫尅の美妙を盡くし建築の古ると謂へとも伎術の妙を極
め材料の總へて寶石を用ひたれり毀損のとふる無し壁畫の總へて
古代の美術を集つめ着色の妙謂はん方なく人物花鳥生きて飛ばんと
するの勢ひ有りければ公達の前後を忘れ夢のこゝちにて詠め居ける
が城主素とより客を好まければ直ぐに面會して厚く饗應しける
公達の圖らず兩三日滯留して暇ま乞ひけるを城主の苦ろに止めて已
まず宴會を張り踏舞を催ふし三人の公女を引き合とせけるが其姿容

の美しきこと固り人間の美人に非らず戀愛の業^{わざ}に足引きの山鳥の尾の長々^{ながく}し春日もはやく立ち暮^くせて山郭公^{やまびと}啼^なくころにもなりけるが一日城主の公達に向ひ

城主

我家祖先以來由緒有りて黄金の鍵一個持ち傳へ重代の寶物として大切も秘藏致しけるが三代以前に誤つて池中に落し忽ち神靈の怒りに觸れ一城封せられて人間の交際を隔斷せられ試みに人間に出てんとするも四方の林中にて途を失ひ決して出づることを得ず候^まかるに鍵を落したる池の是れも由緒有つて水中に人の入ることを禁し候への落ちたる鍵を捜か^し求むるの手段盡きて空しく歳月を渡り傳へて我代に至り候誠と遺憾の至りも存候公達の天然の才智ありて且つひろき人間に生ひ育給への

天晴れよき御工夫も候とんも此鍵再び我手に入り候と神靈の怒り解けて人間又出づることを許るされ百年の遺憾一時も解れてこよなき幸福と存候

と語りけれの智慧敏しき公達これを聞き大に感し何とかして其鍵を得て城主を喜せせ美しき公女娶らんとて頻に思案しけるがせしむ先づ城主に向ひ

せしむス

今の人間世界に「パンプ」を以て水を汲み取るの手段あり水中に入らずして寶物を取り得るの手段の「パンプ」にて汲み干し候ての如何

城主

その誠と珍らしき手段に候若し此事相叶ひ候へば公達の望ま

せ給ふもの何にても進上り不恙なる女子にてもおんこゝろは稱
ひ候ひ、進め参らせん

と答へけるに二公子の打ち喜び人々も差圖りて「パンプ」を製らせ池水
を汲み干しけるが半ばに至りて水の遠かき湧き出て元どの如く満ち
けるは公子の心いら立ち晝夜の分ちも無く汲み干しけれども半ばを
ろよ至れり、再たひ漲つて元とに復しける

あくて數晝夜に及ひけれども何の奏効もあらされり「セーム」種々も
工夫を費やし思案を凝らし心身ともに疲れけるが遂に全身冷結して
氣息絶へ化して石像とありける

「リチャード」兄に代つて思案しけるが是れも疲労して遂に石像と化し
去りける

第三の公子「ウヰリヤム」の番に當りければ「ウヰリヤム」靜かに思案しけ

るがかゝる困難事ハ我力に叶はざれば辭して還るべしとまで思ひ定
めけれども兄の公達を打ち捨て、獨り歸らんこといと歎かわりけれ
ば試みに工夫を廻らさんされど此事も人間に非れば強ひて人
智を盡すとも益あかるべし徐々も手を下だして精神を養ひ居らば其
内よき工夫も出づべしとて城主に乞ひ其庭園を借り嗜み好める家鴨
蟻蜂など餘多蓄ひて我家も在るか如く悠々として戯れ遊びける其容
子の餘りに落着きて深慮ありげに見へければ城主一日其智慮を試み
んとて戯れに

城主

我三人の女子の身の長けも同一く面貌もよく似て候へり何れを
姉とも妹とも見分け難く某も時々見違へ候程に候第三の女子を
そ某最も愛で慈くし候おん身試みに第三の女子おん見分け

給これよ又某庭上よ細かなる眞珠數千粒撒き散らし候かん身試
まに拾ひ給これよ一日の中にかん奏効を期し可申候

といひけれの公子も戯れに之を承諾して三人の公女を見るよ顔色容
貌相同しくて何れを最愛の公女とも見分け難れの翌日を期して約束
し其日侍臣よ向ひて

ウ井リヤム

公女の平生何を好みて食させ給ふや

侍臣

第一の公女の林檎第二の橙^{おれんち}子第三の蜜を好ませ給ひて毎夜臥床
に就かせ給ふとき必らず食させ給ひ候

と聞きて公子の翌朝早く起き出で飼ひ慣れたる蜂の女王を摘まみ三
人の公女の打ち臥したる室の窓の隙間より放ち容れて詠め居けるが

蜂のやがて公女の唇にとまり直ぐに立ち戻りけれの公子の疾く其公
女を呼び醒ましかん身こそ第三の公女にてましまさんといひけれの
打ち驚き誠に然^さにて候と答へけるさて公子の飼ひなれたる蟻數千
頭を隠^{かくし}の中よ容れやがて撒き散らしたる眞珠悉く拾らひ上げさせ城
主へ示しけるが池に遊び居たる家鴨忽ち黄金の鍵を啣^{くは}て浮ひ出でけ
れの神靈の怒り立どころに解け二人の公達も蘇生しけるに滿城の喜
ひ限り無く芽出度婚儀とのひて三人の夫婦打ち連れて元どの城に
還へり其後の兩城親しく交とりけるとぞ

仙子の名附祝ひ

百

或る家の小婢こゝろ直すまはにしてよく立ち働らさ大ひに主人夫婦の意に稱ひてけるが洒掃洗濯のことより厨くろの事おど注意行き届きて清潔に且つ迅速にはたらしけるを夫婦の却つて怪しみ神仙の助けにても有らんなど打ち語りける程なり―に或る日一封の手簡小婢の宛名にて到着しけれの小婢の何方いづかたより來れるならんと開らし見るに其文に一寸まめ―今日けふの男子出生仕候よつき明後日名附けの祝ひ仕度と存候間そもトさま正容として御入來被下度偏へに待入り候尙其日のお迎の爲め人差上可申候あらしく芽出度―

月日

山々

ありざさま

まゐる

とありけれの小婢の驚ろき且つ訝かり―がいかなる處より言ひ越せしものにや往きて見まほしく思ひ且つ強ひて拒まば禍ひ招く恐れもありとて主人へ問ひ謀りけるにさてこそ神仙の案内あるべけれ試みに往き候へ―とて勸めけれのやがて其日に至り山の使者なりとて來りけるに小婢の導かれて至り見るに樹木立ち茂りたる中に壯麗なる家屋ありて其中に入れの裝飾の美―さ謂えん方なり奥まりたる一室に産婦打ち臥しけるが烏木くろくの臥床に錦の布圍重ね床の上の蔽ひの白ろき紗にて眞珠の綴り紐長ひもがく垂れ黄金の盪水晶の盤など總へて始めて其物を見るのまならず曾て聞きたることだに無き品多くさて玉の如き小兒を抱き示して名附けのこと打ち詢はかりそれより廣ろき一室に案内して饗應しけるが皿鉢の總へて瑠璃瑪瑙水晶にてナイフ、フォーク、の黄金なり食物の山海の珍味調へて其美限りなり

百一

かくて名附けの祝ひも畢たりければ小婢の暇乞ひけるも狂げて三日程どまり給へどて強ひてとくめければ三日ばかり立ち辭り去りけるが金銀の皿鉢と珊瑚の首飾とを取り出して小婢も贈りける小婢の人に導かれて元との主家へ歸へりけるに取次のもの戸を開らき何方よりおん入候やと尋ねける故只今山より歸りて候と云ふに取次の重ねて何人にて候やと問ひける故三日前に暇を賜りて名附けの祝ひも参り只今歸りて候即ちエリザに候と答へければ取次のもの其旨奥へ通しけるが異なりたる主人立ち出ておん身の主人の如何なる人に候やと尋ねられ小婢主人の名を云ひければ其人の七年以前に此家を立ち去りそれよりこのかた某住居候おん身の其七年前の主人に仕へたる婦人なるべいと聞きて小婢の打ち驚ろき遠地近地問ひ尋ね元との主人に廻くり逢ひければ主人も喜ひて實に七年の別れなり

いと語りけるとぞ

三絛の金髪

百四

或る貧人夫婦の間だに男子ひとり生じてけるが一人の預言者此子を相して言ひけるに十九歳にして國王の女に配偶すへいとぞよの事遠近に聞こへて奇らき新聞なりとて打ち傳へけるも偶ましく國王の耳に入りければ國王大に怒り其子を召捕りて打ち果たさんどけるが斯くての國民の誹謗を招かんとて微服して其處に到り貧人の家を尋ね王冠を取り打ち被りて入りけるも夫婦大に驚くを押し鎮めて

國王

我が善き人民よ汝天の福慶により良き男子もてる由聞こへたり若し其子を我れに取らせて我か意も隨之、此上無き満足なるそ

や

夫婦

國王の仰せに候へども此儀御免有り度候貧困なる夫婦の行末杖柱とも頼み候一子の未だ幼なくて草木の二葉より脆ろく隙間漏る風さへ厭ひて芽出愛くして候間此儀一ツの御免を願候

國王

我れ汝の一子を望むの夫婦の貧困を憐れむがゆへなり今日より汝夫婦を扶持し又汝も代つて其子を養育すべし

と強ひて乞ひけるに夫婦さての預言の空しからずして一子出世の機運到れるにやと打ち喜び一子「ジョーシ」を進すめければ王の之をうけとり微かに其處を立ち出て小さいさき筐作らせて其子を入れ河中に投して還へりける

筐の幸ひに沈まずして流れ去り二里許り下流に至りて水門よかへりて漂ひけるを水車の番人見認めて引き揚げ筐の蓋開らき見るにふか

百五

如何も愛らさ小兒眠り臥しけれ

百六

番人

我れ久さく一子を望み神に念いて待ちけるが祈念の効空し
らず今日所願満足しけるか

と獨りうなづき小兒を抱き我家に還へりけれの妻も所夫の物語りに
天の與へと打ち喜び最と大切に養育しけるが天性伶俐にして氣象篤
實なれの夫婦の慈愛一方ならず年齒の長するも随ひ相當の教育を施
こし出世の春を待ち居けるに或る日國王の遠征を思ひ立ち餘多の軍
勢を率ひて其處を通りけるが水車の番人も天晴賢こき一子ありと聞
き召抱へんとて其履歷を尋ねさせけるに夫婦のもの十八年前に其子
を拾ひ上げたる事共委のく物語り其時の筐小兒の衣服まで秘め置
きしを取らたし進めけれの國王大ひに驚るさ憾らと態と顔色を和ら

げ一書を認め

國王

我れ遠方に出征せんとしてこゝまで來りしが夫人に言ひ置くへき
事多くて出達の砌り必要の用事忘れたれの此手書此子に持たせ
て城迄使のし呉れよ

とあるも夫婦承引して其子を遣のしけれのシヨイヤの國王の手書を
携へ城に向つて急ぎ往きけるが其夜途を失ひて山中も踏み迷ひ東西
を分かずなりてけるに傍らなる洞穴に燈火見ゆれの内に入り容子窺
ふに老婦一人柴折り焚きて坐し居りける

シヨイヤ

我れ今夜途も踏み迷ひ此山中も入りて事の外難澁致候何卒一宿
を許るさせ給へ

百七

老婦

主人の留主に候へり御宿の叶とじ
と否みけるが「シヨイヤ」の只管ひたすらに乞ひて已ます且つ大ひは疲勞して見
へけれり

老婦

此處の山賊の住家に候へどもおん身此事を他へ披露せずの宿
を貸し申べし

シヨイヤ

一宿を許るされ候へり我れ誓つて此事を言ふまじく候
とて臥ふしど戸は導かれて前後も知らず寢入りけるがやがて山賊歸へり來
たり

山賊

臥戸の方より駟の聲きよゆるり何事にや

老婦

童子一人最と勞れたる容子にて宿乞ひけるゆへ此事他へ漏らす
まじと約束して彼所に臥さしめたり

と聞きて山賊の「シヨイヤ」の枕邊に寄り探り見るは金どての少しも所
持せず一通の書翰ありけれり開らき見るに其文中に左の文句あり

此者到着候へり、竊かよ打ち殺るし禍害わざはひの根をおん断ち可被下候

月日

某城主花押

とありけるに鬼を欺く山賊の眼にも哀れを催ふし誓し思案しけるが
やがて其文を書き改め巧くまに花押を摸擬して元どの如く封し置き
明くれり兼ねて竊み來りし或る公子の衣服一枚取り出たり知らぬ顔
にて「シヨイヤ」に向ひ

山賊

かん身の衣服泥に塗まされて見苦る一城中へ使ひするも斯る裝束いでさまにて門の通行叶と此れも着て往かれよ

とて奇麗なる衣服進めけるを「シヨ一サ」の餘多度辭あまたみけれとも門の通行叶ふまじと聞きてやがて其衣服を着し懇ころに謝禮を述べ其處立ち出て城に入りて王の使者なりと披露し書翰を出たせば夫人之を開らき見るに國王の花押有りて其文中に左の文言有り

是れの某城の公子なるが我が一女も配偶せしめむとて途中にて貰ひ受けて候への我が一子の如く懇切に待遇して我り歸城をお待ち候へ

とありけれの夫人の大ひも喜ひ「シヨ一サ」を殿中へ迎へ入れて懇切にもてなしけるを「シヨ一サ」の專の子細を知らされの煩りに辭退しけれ

ども國王の命なりとて許るさすかくて日を積み月を重ねまた年を渡りける程に王女の親み淺からず淺き河瀬にかゝるその種の賤しけき民草も拔く立ちて飛ぶ鳥の雲井を今の住ま家とし之や三年の光陰を送りけるが國王の遠征より歸へり此体裁ていざいを見て大ひに驚き且つ怒り「シヨ一サ」を引出たし刑も處せんと打ち騒さわひぎけるが夫人の苦諫くさんと王女の哀訴あいそにこゝろ少く柔らき「シヨ一サ」に向ひ

國王

予れに一つの望あり世も傳ふ鬼神の金の髪こがねを頂くと予れ其髪三綫せんを得んこと他年の願ひなり汝之を得て來らぬ我女婿となさん

「シヨ一サ」

鬼神の所在藐然として風を捕ひ影を捉むに異ならずされど君命に候への某これより尋ね求めて左右に献し聊の忠愛の微衷まこころを表

一奉らん

とて立ち出て山を越へ海を渡りて往きける程も大ひなる都城に到着
しけるが城門の番兵誰何して

番兵

かん身の職業の如何

シヨイヤ

我れの學問を以て職として候への天地の間に疑ひしき事ども總
へて講究致候ものに候

番兵

然らぬかん尋ね申さん我城主の愛し給へる泉に天然の酒精湧き
出て候然るに此日頃打ち絶へて湧き出でず此理如何に候や

シヨイヤ

その面白き問題にて候某も始めて承より候への即答致がたし篤

と工夫を廻らし歸途も御答申上げん

とて城門を通過し往きけるが又一都城の門も到着しければ番兵職業
を問ひシヨイヤ學士なりと答へけるに

番兵

然らぬかん尋申度事の候我城中に一樹ありて黄金の林檎を生し候

然るに此頃打ち絶へて菓實を結とす此理承度候

シヨイヤ

面白き問題まで候へども始めて承より即答難致候への歸途に御
答申上げん

とて門を通過し都城を横截りて再たひ大道に出て河を渡らんとて岸
に立ち舟呼ひけるに

舟子

かん身如何して城門を通過し給ひや

サヨイヤ

我れの學士にて候ゆへ不思議なる問題を言ひ釋きて容易く通過して候

舟子

然らぬかん尋ね申度候我れ鬼神の爲に封せられて此河の舟子となり身を脱くの道を知らずよき手段も候ぬかん示し被下度候

サヨイヤ

珍らしき問題なれぬ即答に難及歸途に教へ參らせん

とて其河を渡り深林の中に分け入り鬼窟を尋ねて入りけるよ老婦一人出て、事の子細を尋ねければ

サヨイヤ

我れの云々の子細有りて黄金の髪三綫を乞ふため尋ね参りて候

と答へけるに其詞の簡單にして顔色の罪無きを見て老婦憐れと

老婦

容易ならざる所望なれどもかん身の顔色の罪無きを見て拒ま還へすに忍ひず幸ひ吾子の留主中なきの筈かにかん身を隠し置き金の髪髪を得させ參らせん

サヨイヤ

誠に難有存候然るよ某途中よて三個の問題を尋ねられ候返答を約し置き候

とて其次第を物語りければ老婦のそれをも吾子に尋ね見んとてサヨ

「ヤ」を隠くし置きける

其夜に鬼神と覺ぼしき物黄金の毛髪振り亂たりて風の來るか如く颯と音して歸へり來り終日世界を往來して痛く勞れたりとて老婦の膝を枕として睡り入るを老婦見濟まりて黄金の髪一綫抜き取りければ鬼神目を開らき

鬼神

今何物か我頭に觸れたりと覺ゆるぞ

老婦

我れ今怪しき夢を感じ或る都城を通過し酒泉の湧き絶へたる理由を問これ苦るしとの餘りかん身の頭も觸れたり

鬼神

其酒泉の中に石有り石の下に古るき蟾いまかへる除有りて常に酒泉を飲み

干すり故なり

と答へて再びひ寝入りければ老婦又一髪を抜き取り鬼神眼を開らけ

ん

老婦

我れ再びひ怪夢を感じ都城を通過し黄金の林檎此頃打ち絶へて菓實を結とさる理由を詰り問これ苦るしとの餘りかん身の頭に觸れて候

鬼神

其樹の根に一頭の鼠生して主根を喰ひ菓實の成熟を妨げ候ならん

と答へて三たび睡に就きけるが老婦又一髪を抜き取りければ鬼神眼を開らき大に怒りけるを押し慰め

老婦

我れ三たび怪夢を感し河を渡らんとして舟子に其身の解脱すき方法を問ひ詰られ苦るゝさに又おん身の頭に觸るたり

鬼神

其舟子若し他の人を渡たし且らく代つて其梶を取らしめし舟子の身解脱して代つて梶を取るもの封せられん

と答へて寝入けるが翌の日鬼神の出て行きたる後とにて老婦の「ジョーデ」に三髪を與へ其答へをも聞かしめけれし「ジョーデ」の餘多度拜謝して歸途よ就き前の問題を解説して實地を驗するに果して其言の如くなりしかの難無く人間よ立ち還り國王に謁して三綫の金髪を献し王女に配偶せられけるとぞ

王子獅子の形ちをうく

或る商人三人の女子をもちけるが或る日遠方へ旅立せんとて子供に暇乞してさてわがかへるとき何にても望み次第のもの土産として持ちちのへらんいざ思ひくゝにのぞみくれよと問ひけれし長女の金剛石の指環をのぞみ次女の真珠をといひけるとき少女のわをの雲雀一羽ほしきものなりとて各々約束して門前まで送り出でける家を出て、とや數ヶ月も立ちけるのち商賣の用向もすきて且が屋へかへらんとて金剛石と真珠とを約束の通り買ひ求めさて愛女の所望なる雲雀一羽得んものどさがしもとめしにあやよく見當らざれしいたく心配しつゝ、歸途よのぼりけるがそのあたりよいとうつくしく築きたる城あり城のうへ晴れわたりてけしきよきところにやがて一羽の雲雀飛ひのぼりて囀つる聲々ふと商人の耳に入りけれし是れを偏

強きやうの物なれどて眼もはなさず不たふせきて眺め居けるが、をらくして其鳥
とび下り傍らなる叢の中に落ちければ、すぐに従者に指圖して難なく
雲雀を手に入られ、さう胸もとろくほどの思ひをなす、其場を去
らんとしけるときいつこより來りけん、一頭の獅子たけり出て、草木
大地も崩るゝばかりに撼ふるひける

獅子

わが大劫なる雲雀に手を觸るゝものいざ一噛みに喰ひ盡さん

商人ふるへなからに

何事をも辨へず不法の所業をなす候段ひらにゆるし給われよ金
子ならぬ何程にても調達申上べし、おれにてお託ひ申さん

獅子

金錢の望まぬ、其方命ち惜くゆゆるゝ與へん雲雀も其方よ取ら

すへ、其償ひとして家に還へり、とき一番に其方を迎へたる者

我れに得させよ

此答へをき、商人且つ喜び且つ悲みて思ふようわれ家に還へらぬ少
女こそ一番よ出て迎ふへけれ、それを野獸に與へんよりむゝる此場
に我命を取られた、と此時に

従者

主人御歸館のせつ一番に飛び出すもの、狗また猫なるへ、兎
も角も約束して此場を免れ給へよ

従者のすゝめに心ならずも約束して雲雀を携へ吾家を差して歸へり
けるに父のおも影を見るより早く出て迎へ、い少女にてつぎよ次女
つぎに長女何れも父の膝もとよ打集ひてかぎりなくよろこび土産の
品々を分ちなせしけるよ、父涙あなをながして獅子と斯々の約束しけるこ

とを物語れの少女のわたくしゆへの御約束に候への何卒おん暇ま給
のれよと強ひて望みてやまされのまたせんすべも泣々に父子恩愛の
きづなにひかれや、城ちかく送り行きける

城門の前よて彼の獅子少女をうけとり内に入れの美麗なる宮殿あり
てそのうちに玉の輿かきよせける少女の獅子の姿たを一目見より
おそろしかなしさがざりなく氣も絶へくにてありけるが暮れに
およびてや、こゝちつきあたりを見廻すに麗しき王子一人玉の
倚子よかゝりて

王子

われこそ此城のあるトなり魔のために封せられてひるのたけ
き野獸の形ちをうくの雲雀のわがとざわひのおみりなりその
雲雀を取つてたちどころに魔の封印をときたるそなたの實の吾

妻と申すべし今宵これにて婚禮せん

少女の此言葉をきいた夢のこゝちりてありけるがさて婚禮もすみ
や、日數も立ちてけるにまことに人間の王子にして一城の主に相違
なければ榮華のたのしさをきわめけるがたちまちふるさとをおもひ
いで、そゞる涙にむせび入るを主君見て

いざさらばおん身のふるさとへかへしまいらせん親はらからに對
面してつもる思ひをおんものがたり候へ日數のへぬまにいそぎこ
なたへおんかへり候へ

とて従者あまた召させて故山へかへりつかわしける
家にかへれの姉なる婦人他家へ婚禮せんとして支度もつばらなりけれ
のその事の終はるまで父の家にとゞまりさてもとの城へぞ還へりけ
る

うくするうちまた故郷よりおどづれして次の姉の婚姻のこといひこ
したれのこのたびの夫婦打ちつれて姉の婚禮に立ち合はんとてよろ
ず支度して立ち出てけるが

王子

われかん身のはたらきにて魔の封印をのがれたれども今ひとつ
の恐れありそのゆへに一たびとも火の光りにてわが身を照さ
るれいたちまち鳩の形ちをうけて飛び去るべし必らず燈火に油
断なく給ひそ

とてかたく約束して行きける

この約束のことひろかに披露しければみなくこゝろして王子の室
をばくらくして燈火を點せず王子ひとりその中よりありけるが寺にて
儀式終り新婚の夫婦兄弟家よかへり客席にて燕會を催ふしけるに

燈火花の如くかゝやきて壁のすきまよりもれいでたる光り糸の如く
に王子の室に入りける

燕會はて、夫人王の居室に到り見るに白き鳩一羽座にありけり

鳩

われいま鳩の形ちをうくる上の七年の間た虚空をどびさらすの
魔の封印とけしかん身とれを慕ひ給は、わが羽をぬきて道にか
とすべし羽と血の痕とを見とめてわが後に從ひ給へよ再び對面
のときあるべし

と言ひのこして虚空をさして飛び行きけるに夫人の涙を揮ひつゝお
ちたる羽をとりとて天のはてまでも追ひゆきける
かくて七年の星霜を経て對面の期も近きにあれ、夫人の喜ひ大方な
らすあまりのうれしさに小躍りてたちまちまぢを失ひけるが羽もそ

らよりかちずなりければなとせの辛苦水の泡ふたゝびあふ瀬の望
み絶へて絶ゆるばかりよ聲をあげ天に向て訴へける

夫人

噫太陽よ君の光りくまなく照らしてちいさきすさまのそここと
ゞき高き塔尖のすへまでとゞく鳩の行衛いらせて給へよ

太陽

われ其鳩の行衛いらすされどこのちいさき籠ひとつおん身に與
へん大事のときひらき給ふべし

せんすべなけれの其籠をうけとりうるゝとて居けるうちに野も
山も暮れて月の出でけれのまた月に向つて訴へける

月

われも鳩の行衛をいらすこの玉子ひとつおん身に取らせん大事

のときの用に立つべし

玉子をうけとりてどかくするうち夜の風さむく身にこそけれの風に
向つて訴へける

夜風

われもいらすされど東西南の風に問ひ尋ねん
とてまたく吹さけるに東の風もいらす西の風もいらす南の風に問
ひけるとき

南風

われよく其鳩を知れり紅海のはどりまで飛ひ行きけるととき七と
せの日かすまちて再び獅子の形ちをうけかして一頭の龍
とたゝひ未だ勝負わかたずさて其龍の或る王女の封せられて
龍の形ちをうけしものならん

夜風

百二十八

さることのあらんよの世れよき工夫あり夫人紅海までいそぎゆ
き給へ濱邊^{はまべ}よ蘆^{あし}うち茂りてあらん其蘆を敷へて十一すじよ至り
そのひとすドを妨りてそれよて龍をうち主君にすけだち給へ
またかゝこに一頭の麒麟^{きりん}あつて翼鳥^{つばさ}の如く波の上にかみおる
べいたゝかひ終りてすまやかにそれにおん騎候へ麒麟海を渡つ
ておん身等を故郷へ送りうへさんまた此椎^{いし}の實^みひとつ携へ給へ
麒麟つあるゝどき椎の實を海よ沈むれれたちまちに大木を生し
翼をやすむるに足りぬべいいざ紅海へいそぎ給へ

也此言葉に勇氣つきて紅海まで行き見れ風のほとづれ虚空ならず
うのミづぎわの蘆さりととりて敵のうらを打つかど見れ忽ち封印
どけて美しき王女となり獅子かど見し王子なりあらうれやと言

ふ間もあらせず王女の王子を携へて麒麟に騎して飛び去りけり
余りに事のすまやかなれの夫人氣を奪これ心も亂れ茫然として立ち
居けるかくてある趣きよあらねのとてあしよまかせてはせあるさま
たうき年月をかさねけるが或る城の前に通りかゝり城の主のことな
せあたりの人に尋ねけれの城主のくにて王女の此頃婚禮の支
度中なりと聞くまゝにおもひ當ること多かれのやがて太陽よりうけ
どりたる篋ひらき見るに錦の小袖あまた出づ夫人手つから取り出だ
して身に纏ふに春花の霞にうつり秋葉の霜にわけるか如くうつく
さ謂ふばかりあゝかくて城中に入りけれの王女一見して小袖の色に
こゝろ奪われかゝるにうき世にあらわが婚禮の晴れ小袖にもが
なとてひたすら夫人に乞ひけれの

夫人

百二十九

まひてのおん望まかれの小袖進めまいらせんされどわらわにひ
どつの願ひあり婿君にて渡らせ玉ふ王子に人無きところにて一
度對面を免るさせ給へ

王女

そのやすきことなり今宵我君の寢室まで忍ひ入り給へひそかに
逢はしまいらすべしゆめ疑ひ給ひそ

とてその夜從者に命し王子の睡れるをうかひ昏睡劑一盃すゝめさ
せける夫人忍ひ入て見るに玉のかほはせ温然として睡り臥せどもま
がふかたなくわが所天なれの飛ひつくばかりにはせよりにてゆり起こ
せども睡劑のいたくきゝたればその甲斐なすもる思ひのかすく
をなまながらにかきくとき猶かきくときそのうちよ時尅とやうつ
りけれの從者に促がされ室を出で小袖打ち脱ぎて歸りける

逢ふてうれしき甲斐もなく玉のうはせものいはずいはずかたらぬ
寝すがかをせめての一生のおもひでも今ひとたびもうちながめ暇乞
して立ち退かんとまたも思案にくれけるが月より得たる卵子取り出
だし一生の望み是れまでなりとて破りけれの金色の鶏十二の雛をひ
きひて出でける夫人静りにこれを驅りつゝ王女の宮殿近く往きける
に精金の玉を轉はす如くさらくとしてあたりを照らし光り宮殿の
窓に入る

王女玻璃障を隔て、一見し世に希有の鳥どもなりとて窓を開らさひ
たすら夫人に乞ひけれの夫人答ふること前の如く今ひとたびの對面
をど望みけれのやすきことなりとて其夜の十二時を約束して別れけ
る

さて王子前夜夢見いとありかりしとて從者またして睡劑のことな

どあからさまにきゝけれの其夜にくすりのまたる眞似して服せずあ
りゝ夫人入り来たれり王子のおどろきひとかたならずわれ封せら
れてこゝよ来たれりいざ解釋のとき到れりこよひどもくゝに忍び出
でんとて夫人の手を把り玉階をくだり麒麟は鞭あてゝ海を渡り遂は
故郷へ歸りける

庭木の花のうつろへともかわらぬもの池のいづこそがうへにあり
らざり出だしてかんがみるにこの七とせあまりの辛苦にも似ずよる
年波のいそいなれの玉の顔とせ花の色相映して楽しくくらゝける



どあからさなにかさしけれの其夜ひくすりのとたる真闇して散せすわ
かりよ夫人入り来たれの王子のみとろさひとたなるすわれおせら
れてこいよ来たれやいよ解解のとき到れりこよひとこもんに忍び世
でたると夫人の年を記る世帯をくだり麒麟は轉じて、まをたすは遠よ
故郷へ歸せける

鹿水の邊のつらへとるかまきりあるの池のいづこをかうへなる
らとし出たてかたがみるにこの七とせの夜りの辛苦にさ個する
年波のいそしなれ玉の顔にせ花の色相映して染くくくらしける

シンデレラの奇縁

或る富家の細君ながくのいたつきにて最早全快もおぼつかなく見へけるが終焉いまはのきりにのぞきてひとり娘を枕邊まくらべちかく呼びよせ手をとりて涙ながらに

母

是れ娘よ斯くばうりなげりすにこの母がいまのひとことをさへ候へ母がこの世を去りてのちもおんこゝろばへやさしくすなはにして父上につかへよろづにつけまめくしくおんはからひ候へいかなる事のおゐるともいかなるうきめに逢ふともゆめ人々をうらま給ひそ母が草葉のかけよりまゐるそよといふ聲系の如く細りほそひといきつきて眼をどちけるがかくてあるべきことならねば野邊の送りもすみてけり

少女の母の一言の身にしみてかよるづまめやかに はたらきさて日ごと
 母の墓前にゆき生ける人に對する如くもの打ち語りての泣き入
 ること雨の晨風の夕暮の阻てなく打ちつゝさけるうちに新らき土
 に苦むして草さへ日ごとよ生ひけるがいつか草も枯れて霜落ちま
 た雪降り積りて石も埋れけるを小さいさき手にてかき拂ひ母さまそ
 お寒くておわすらんどいふ聲さへも凍るほどの冬の寒さもいつか
 退そきて春日あたゝかに土の底までもとほるかと思ゆるころに父の
 後妻をそ迎へける

後妻に二人の娘ありまな連れ來たれるものにてこれを愛するの餘り
 先妻の娘をにくまゑたげそのあやまちなせ構へこゝらへて主人に
 告げ遂に下婢同様にめいつかひける衣服あかつき破るゝといへとも
 與へざれの肱のまわり肩のさきなどところぐ肌へあらわれたるさ

まの卑人乞食の子に誤つて絶世の美人あるが如くまた孔雀の雛の泥
 に塗れて荆のあひだにあるが如く

かくて隆冬の寒さよも破れたるひとへ物一枚を纏ひ立ちはたらき夜
 の布團一枚もあたへられず曲突の傍らに臥して明かすけれの總身に
 煤まされてけるを沐浴さへゆるさず繼母と二人の娘の此体を見てお
 かしく諱名して

「シンドレラ」即ちおすゝと呼ひける

主人商用にて旅立ちせんとて三人の娘を呼び土産のこと約束しけれ
 の二人の娘の金の腕環眞珠の首飾など望みけるに

おすゝ

わらわの斯様のもの望み候とも用ゆる日さへ無ければその詮な
 一父上おん歸りの節途にておん眼につき候花一枝おりて賜ひら

いふよなき満足に候

といひて別れけるが商用もすまて歸る途中にふとおすゝの望まのふと思ひ出し傍らなる花ひと枝手折りて家に還りけるがおすゝの其花をおし頂きやがて母の墓前に手向け置きさて常の如く日ごとよゆきで泣きけるが此花の一枝根をおろし枝を生して一樹となりその上に白き鳩一羽とまりてけり

さて或る日のことなりけん此土地の城主宴會をひらき城下にて富豪の聞へある家々に案内して踏舞會を催ふしけるがおすゝの家も案内ありて二人の娘のうつくしく衣裳とゝのへ出てゆかんとしけるときおすゝこの内おもふよりわれ母上の存生中に踏舞音曲唱歌まで何くれとなく指南をうけしもかゝる時の用意なるに今此家の下婢同前常の衣服だにも身を蔽はず嗚呼たのみなき身の果てかなど泣

き沈みけるがまたおもひ直してわが身落ぶれたれども此家の一女なりたどへ繼母のゆるし無き迄も一往乞ひ見んこそ本分ならめとて宴會に趣きたきよし乞ひけれの繼母の打笑らひ戲きないひそ下婢の身分にて城主のおん客といと言はんせしがおすゝも元とい此家の一女なれの無下にとゞめんの争ひのもとなりとおもひ

繼母

そのやすきことなりされどわらわ只今麻の實ひと筐誤つて曲突の中へくつがへしたれのおん身それを拾らひ上げさて宴會に赴き給へ

と答へけれのおすゝのいそぎ厨にゆき見るに灰の中に麻の實一升はども打ち交りてありけれのいかゝなそへき工夫も泣くく裏の戸おし開らきて小さいさき足はや躍りながら

鳩や來ひく麻のみ拾らへ

鳩やこひくわが身の大事

と歌ひけれの白き鳩あまたの友達を携へ墓所の方より舞ひ下たり見
るまゝ麻の實を啄み分けれのおすゝの之を繼母に示してひたすら
ゆかんことを乞ひけれ

繼母

さらば遣ひ申さんされどおん身の衣裳もち給ひぬ此事叶ふ

まじ

といひけるにおすゝのはやくゝるせきて氣もくるへるが如く躍りな
がらばりり出て、母の墓前にさめくと泣きまた立ちあがり樹の下
にて

鳩やこひくこの木にとまれ

揺へよこの木をふるへ

ふるひ落とせよ金銀を

雨の降るほど金銀を

と歌ひけれの金銀にて飾りたる踏舞履一雙樹より落ちけりこれをう
がちて

鳩やこひく此木をふるへ

ふるひ落とせよ錦さの小袖

と歌ひ出たすとき錦の小袖降り來たれりおすゝのはやくこれを取り
あげ家に歸り見れぬ繼母も二女もまな城主の宴に赴きける也へいそ
き沐浴して小袖打ち被て城に入るよ人々その美しさ驚ろきこの何
方の公女にてまゝますにやひとり渡らせ給ふこそおゝりけれなどさ
ゝやき珠玉ちりばめたる廣間に案内す

廣間のうちに近隣の城主の公女花の如く立ち並また一方に富家の女子あまた集ひて是れも美しく雲かとはかり疑たるおす、案内に任せて入り來れ、此城の公子打ち見てこの何方の公女ならん希世の美人よこそと深かくよるこび鄭寧に傍に近づき共に一曲舞えんと望みけるゆへおす、辭ますして一曲を終りしが公子のその傍を離れず數曲舞ひけるほどにはや東方白ちかくなりぬ公子濁きて卓の盃をとりふたつと傾け、るときおす、おすさまを得て廣間を出で辭して吾家へ還へり小袖打ちぬぎて裏の方に隠く置き常の如く曲突の前に臥し居たりけるが繼母も二女も尋ひて歸へりみな疲れて臥しぬかくて數日すぎけるが公子のかの美人のこと忘れ難く是非に迎へて婚禮せんとてさがし求めけれども知れず遂にまた饗宴をひらき踏舞を催ふしけれ、おす、の家へも請狀來たり繼母

と二女どの前の如くおす、を遺こして出てゆきける

おす、の往きたさの限りなくて氣もこゝろも身につかずは、り出て、母の墓前に泣きまろびまた立ちあがり躍りつゝ、

鳩やこひくこの木をふるへ

花の小袖に玉のくつ

ふるひ落とせよ我の前へに

雨の降るほどわが前へに

と歌ひけれ、分けて美しき衣裳首飾履など降りけるを打ち被て城に入るに、おのたび、案内の人々公子の言ひ合めに、客の從者に尋ね名をさし、ひそかに公子へ通しけるがおす、の從者無しに入來りしを案内の人々從者を見失ひたれ、とておす、に名を聞かんとせしがその容子の氣高く、とや、なるを見てこれやどの美人の何れ一城の公女

み相違あらト名をきかずとも後に分かるべしこゝにて無禮すべからずとおもひいと鄭寧に廣間も案内しける

公子の親おやからかすゝをうけとりいと慙おぼろにもてなりつゝとも、に數曲を躍りけるがおすゝの隙すきを得て廣間を出で立ち歸らんとしけるを饗應の人々此美人こそ公子の思ひこがれ給ふ神女なれその名を聞かまほしとて近づきけりおすゝのそれとこゝろづきて他の用事に紛らし其人に託して再び廣間も入り多人數のうちうちに紛れ入りすきを見て庭に出で木蔭づたひに宮中を免ぬれ出でけるが庭にて物音に駭おどろき履片足脱かたしきしを拾ふ間さへなくていそぎ吾家へ還へり常の如く打ち臥しぬ

其夜公子の踏舞の最中に公女を見失ひうろく見廻しけるうちに入る月の庭にさし込み玉樹の影水晶の窓にのぼりけるが美人のおもろげちらりと見へてけりおすゝやく庭に出て追ひ求めけるに美人の影消へて後に玉の履一隻残りけるを拾らひ見るに正さしく公女の履かりけり次きの日より遍ねく人さし出り近隣の城主とじめ城下の家々も到り前夜踏舞のそぎり履脱かたしききおとりたる婦人迎へ娶らんとて捜がし求めけれども知れず果ては其履をもち往き凡そ美人ある家をととく尋ねて趾かたに其履を合わせ見るに履の形かたちいと小さいさくて合ふ人なりかくておすゝの家も来りけり繼母喜ひ長女の趾かたに合わせけるが少し合ひ兼ねるを強ひてとかせさて言ふようの前夜我女のおとせし此履に候などほどよく使者をすかして歸へしける

使者の少し疑うたがひし思へともそれにて役目そみたりとてなを履ひさげて歸りけるに途の傍らなる小高きところに音楽唱歌のよへ聞へけり立ちとまりて之れをさくに墓所の樹の上に白き鳩とまりてそ

のところより歌の聲きこへける

屢を見よみよ裏まで見よや

屢の裏邊に血のあとあらん

主をさがせよ屢のぬい

さがし當れよくつのぬい

此聲をきゝて屢の裏を見るに果して血の痕ありけるに繼母が強ひて吾子にはかせ踵を傷つきたる証據なりと使者ふゝろつきて再たひ其家にゆき問ひ詰りければ妹なる娘はかせけるに是れもまた踵傷のきければ何れも眞の屢の主にあらずとて使者立ち出でけるが途中にて前の如く歌聞へける

歸れよ歸へれもいちど歸へれ

捜かし當れよその屢のぬい

と歌ひけるをきゝ再たひ其家にゆき此外に女子のおわさずやと問ひけるゆへ主人おすゝを呼ひ出たしはかせけるに恰好合ひぬれこのかん方に相違なからんとて詰りけるにおすゝ包を難くて屢の一俵を取り出だせし使者の喜ひこのこと城主へ披露しければやがて玉の興りゝせておすゝを迎へて歸へりける

明治二十年三月十五日版權免許
明治二十年四月 出版

定價金四拾錢

譯者兼
出版人

島根縣平民

菅 了



神田三崎町壹丁目
壹番地寓

東京府平民

赤坂龜次郎

神田小川町拾番地

發 兌

集 成 社 書 店

神田小川町拾番地



4T133

東京銀座四丁目

博聞社

同 通り三丁目

丸善書店

同 神田裏神保町

澤屋蘇吉

大坂心齋橋通北久寶寺町

三木佐助

京都河原町通り

大黒屋書舗

越後長岡

目黒十郎

鹿兒島六日町通り

富山仲吉

集成社發兌書目

鳴鶴藤田茂吉先生著○巖谷一六先生矢野龍溪先生序跋
犬養木堂・森田思軒・其他諸先生序跋評

○濟民偉業錄

前編全一冊 洋裝美本 定價金一圓五十錢
石版繪入

此書ハ鳴鶴藤田茂吉先生カ今ヲ去ル三年前明治十八年ノ秋ニ稿ヲ起シ昨年初ニ完稿セルモノニシテ世上陳腐ノ小説トハ全ク体ヲ異ニシ先生カ特有ノ才筆意匠ヲ以テ編述シタルモノナレバ彼ノ西洋小説家ノ糟粕ヲ拾ヒ又本邦小説家ノ殘唾ヲ嘗メテ人ヲ瞞スルノ類ニ非ズ其結構ハ明ノ嘉靖年間亟相嚴嵩事ヲ用ヒテ朝廷ノ善類ヲ鋤キ總テ己レノ黨與ヲ以テ政權ヲ專スルニ當リ楊椒山ヲ始メ諸名士奮起シテ之ニ抗爭シ或ハ貶謫セラレ或ハ誅戮セラレ俺倭寇邊ニ逼リテ内外頗ル多事ナリ此時嚴嵩及ヒ其黨與ハ天下有爲ノ士ニ黨人ノ名ヲ附シ志士ヲ排擠シ朝野交モ相爭ヒシ事跡ニ就テ最モ新奇ナル脚色ヲ立テ其意匠ハ西洋ノ新主義ニ基キ其精神ハ今日ニ行ハルヘキ新思想ニ據リテ巧ニ健筆ヲ揮ヒ而シテ其詞致ハ最モ緻密ナル西文ノ法ニ則トリ之ヲ貫クニ孟軻氏カ主唱セル民ヲ本トシテ治ヲ爲スノ道義ヲ以テシタル者ナリ一卷凡ソ五百五十片紙卷中ノ骨髓ハ當時日本ヨリ數々邊ニ寇シ彼國ニ稱シテ倭寇ト云ヒ最モ支那

人ノ畏怖スル所トナリシ一豪傑ノ遺子楊椒山ニ養ハレ卓拔ノ才識ヲ以テ自ラ念チ官途ニ絶チ四方ニ周遊シテ諸名士ニ結ヒ嫌疑ノ間流離辛苦或ハ急難ヲ遭レテ雪山ニ閉居シ或ハ厄ニ罹リテ獄ニ下リ万死ノ途ニ出入シテ纒カニ志ヲ貫クノ顛末或ハ處女奸吏ノ爲メニ家ノ倫落ニ逢ヒ男裝ヲナシ意中ノ人ト相會ヒ相離レ其間考試ヲ受ケ遂ニ登第シテ按察使トナリ以テ家ノ仇ヲ報スル等珍說奇事愈々出テ、愈々新タニ事ハ人情ヲ離レヌシテ文ハ靈活ナリ其精評ハ讀者ヲ俟テ見ルヲ得ヘシ

○哲學論綱

全壹冊 近刻

菅了法氏著キニ歐洲ニ留學シテ專ラ哲學ヲ研究シ歸朝ノ後始メテ此著アリ希臘ノ「ソクラテース」「アリストートル」等凡ソ十餘派ノ哲學ヲ解釋シテ精密ニ論辨セラレタル一大著作ナリ議論ノ深淺廣狹ハ專門家ノ公評ニ讓テ茲ニ贊セヌ但文章ノ流動活潑ナル論辨ノ縝密ニシテ雄麗ナルトハ多ク比類ヲ見サルナリ

○新日本之青年 全一冊 四月中旬出版

今ヤ我邦知識世界ニ於テ一大革命ノ時機ニ遭逢シ其ノ猛勢ハ我カ人民ヲシテ冷笑ノ

人民タラシメ放逸ノ人民タラシメ薄志弱行ノ人民タラシメ其ノ學問ヲシテ生活的トナシ偏知的トナシ懷疑的トナシ我カ有爲活潑ノ青年書生ヲシテ空シク岐路ニ彷徨セシムルニ到ル豈ニ慨セサル可ン哉此ノ書ハ嘗テ「第十九世紀日本ノ青年及其教育」ト題シ文學世界ノ大喝采ヲ博シタル論文ヲ增補校正シタルモノニシテ其ノ大旨タル徳川封建社會ノ學問ヲ說キ維新以來明治社會ノ學問ヲ說キ現今知識世界ヲ一變セサル可ラサルヲ論シ一變スルノ方法ヲ論シ教育上ノ妄想ヲ排シ其ノ正鵠ヲ示シタルモノニシテ其ノ議論ノ精確新鮮ナル其ノ文章ノ奇傑豪宕ナル一讀人ヲシテ驚カシメ再讀人ヲシテ喜ハシメ三讀人ヲシテ鼓舞激昂自カラ禁スル能ハサラシム然ラハ則チ此ノ書僅々タル小冊子ト雖モ知識世界ノ羅針盤ニシテ新日本青年ノ進路ヲ照ス一大燈火ナリト云フモソレ豈ニ誇大ノ言ナラン哉

小崎弘道先生著

○政教新論

全一冊 定價金四拾錢

今ヤ儒教忽然トシテ茲ニ滅ヒ佛教亦萎靡トシテ競ハス此零落ノ中心ニ立テ獨リ基督教ハ駭々然風起リ潮奔ルノ勢ヲ以テ我社會ヲ支配セントス實ニ是レ我道德世界ノ一大波瀾ト云ハサル可ラス而シテ此現像ハ果シテ如何ナル感化ヲ我カ日新改革ノ政治

上若シクハ社會上ニ及ホス可キ乎蓋シ基督教ノ擴張ハ特リ宗教上ノ問題ニ止ラス併
セテ政治上社會上ノ一大問題ト云ハサル可ラス是レ政教新論ノ著アル所以ナリ此書
博識篤行ヲ以テ基督教社會ニ有名ナル小崎弘道君ノ手ニ出ツ其議論ノ精確ニシテ其
文章ノ明快ナル固ヨリ怪シムニ足ラス殊ニ基督教儒教ノ優劣及儒教ノ今日ニ行ハル
可ラサル所以ヲ論スル一點ニ於テハ親切痛快實ニ及ヒ易ラサルモノアリ江湖ノ諸君
幸ニ愛讀ヲ賜ヘ

尾崎行雄先生著○君山、微笑、拈花、三先生評

○新日本

初卷再版
二卷三月出版

洋綴美本石版繪入
定價各金五十錢ツ

勿チニシテ慷慨長歌忽チニシテ情思纏綿忽チニシテ英雄忽チニシテ佳人鐵騎馳突ノ
狀尙ホ目ニ在テ清談高論ノ聲耳ニ徹ス變化自在意匠巧妙真ニ鬼神ヲ泣カシムルノ筆
也而シテ著者ノ目的トスル所ハ政治、産業、學藝、及ヒ社會萬種ノ事項ヲ改良シテ日本
ノ面目ヲ一新スルニ在ルヲ以テ變名ノ下ニ當世ノ名士ヲ網羅シ其性行談論皆々各々
因據スル所アリ其用意ノ深遠ナル素ヨリ他ノ花ヲ品シ柳ヲ評スルノ小説ノ比擬スヘ
キニ非サル也之ヲ讀ム者以テ朝野諸名士ノ秘事ヲ知ルヘク以テ歷史上文學上政治上
ノ逸事ヲ知ルヘク以テ外交上ノ秘機ヲ知ル事ヲ得ヘシ文章ノ流麗ナル意匠ノ巧妙ナ

ル記事ノ新奇ナルハ尤モ嚮キニ世上ノ大喝采ヲ博セル輕世偉勳ニ超ルモ決シテ之ニ
劣ル事ナシ江湖ノ諸君子幸ニ愛覽ヲ賜ヘ

學堂尾崎行雄先生著○大隈重信公、矢野文雄先生序○末廣重恭、藤田茂吉、笑浦勝人、
犬養毅、加藤政之助、吉田熹六、森田文藏、井上寛一諸先生評

政界經世偉勳

洋綴美本
全二冊

石版肖像密書入
定價九十五錢ツ

天下ノ奇觀ハ英雄豪傑ノ言行ヨリ奇偉壯快ナルハナシ滄海大ナリト雖也之ヲ英雄ガ
天地ヲ施轉スルノ偉業ニ比スレハ唯々其小ナルヲ見ルノミ而シテ近世宇内ノ大豪傑
ヲ舉クレハ人皆ナ必ス三指ヲ露相ゴルヲコッフ英相ベコンスフ、#1ルド普相ヒスマ
#1クニ屈ス普露二相ノ歴闕奇偉壯快ナラサルニ非スト雖也皆々門地ノ德ニ倚ラス
ハ即チ名士ノ推挽ニ因テ漸次昇登セル者也之ヲ英相ベコンスフ、#1ルドガ穠多同様
ノ賤民ヨリ起リ獨力ヲ以テ相位ヲ取レルニ比スレハ立身出世ノ奇偉壯快ナル固ヨリ
日ヲ同フシテ語ル可ラサル者アリ今マ此書ハ微侯ガ卑賤ノ一寒生ヨリ起テニタビ大
宰相ト爲リ歐洲一代ノ名士ヲ叱咤凌駕シテ雄名ヲ天下ニ轟カセル履歷ニ基テ最近五
十年間ノ英國内治外交史ヲ敘述セル者ニシテ政治ノ得失制度ノ沿革ニ至テハ之ヲ叙
スル一特ニ詳密ナリ故ニ讀者微侯ガ豪壯沈痛ナル言行ト諸英雄ガ智略ヲ闘ハスノ奇

觀トニ眩迷シテ手卷ヲ離ス能ハサルノ際知ラス識ラズ制度ノ得失、内治外交政策ノ秘機、及ヒ歐洲最近五十年間ノ雄壯快活ナル歴史ヲ領得スルヲ得ヘシ時論之ヲ評シテ近世ノ一大奇書ト云ヘルハ蓋シ偶然ナラサルニ似タリ江湖博雅ノ諸君子幸ニ愛顧ヲ賜ヘ

中江篤介先生編

○革命前法朗西二世紀事

洋裝美本完一冊 定價九十錢

一千七百八十九年法朗西革命ノ一舉タル實ニ千古ノ偉業ニ自由平等ノ大義燦然トシ其間ニ煥發シ歐洲諸國ノ局面ヲ一變シ政術ヲ始テ理學高亮ノ旨義ニ合スルヲ得セシメリ然而ソ當初國會召集ノ時ヨリ早已ニ上下ノ相軋轢スルヲ致シ人心日ニ益々衝激シ潰決橫流ノ極國中到處屍ヲ堆シ血ヲ湛ヘ今ニ至リ人ヲノ悽然タラシム而テ史籍ニ據リ蒐討スルキハ斯無前ノ禍亂ヲ階セシ所以ノ吉歴々緣由ノ存スルアリテ決テ偶爾ノ事突如ノ爲ニ非ルヲ見ル本書筆ヲ王路易第十五ノ踐祚ニ起シ一千七百八十九年代議士ノ來會ニ訖ハリ其間佛國內外政策ノ得失將相ノ賢否并ニ諸種學士ノ議論等凡ソ革命ヲ醸出セシ所以ノ者ハ羅列ノ一目ニ瞭セシメ書中人物ノ性行ノ如キハ模寫シテ其細ヲ極メ又其尤モ顯著ナル者ニ係リテハ彼土傳ル所ノ眞像ニ據リ銅鐫シテ之

ヲ挿ミ讀者ヲ直ニ其人ト一堂ノ上ニ晤話スルカ如クナラシム願フニ世ノ經綸ノ志ヲ懷抱スル諸君一タヒ此書ヲ誦スルキハ其徒ニ凡案上把玩ノ具ニ非スシテ少ク自ラ警ムル所有ルヲ得ン
東洋學人小野梓先生著

○國憲汎論

假裝分本 全三冊

賣價各金壹圓

此書ハ博學多才壯年有爲ノ政事家ヲ以テ其名聲ヲ近時ニ轟シタル小野梓先生ノ新著ニシテ明治九年筆ヲ下シテ以來七ケ年ノ久シキヲ繼テ始メテ落成シ通篇四十餘章ノ多キニ至リ廣ク英米佛學諸大家ノ論說ヲ集録シ遍ク宇內各土ノ憲法ヲ類從シ其得失ヲ斷スルニ先生平生ノ持說ヲ以テシ之ニ挿ムニ本邦古今ノ典故ヲ以テセルモノナレハ其國憲ノ要目ニ於ケル細大論シ盡シテ殆ント漏ス所ナク實ニ新主義東漸以來未曾有ノ大著述ナリ今也國會開設ノ期將サニ近キニアラントス天下ノ志士ニシテ苟クモ其意ヲ政治ニ注クモノ宜シク坐右ニ備フ可キ最大良書ナリ

英國マクドナルド氏原著
日本赤坂龜次郎譯

○麻氏財理學

全三冊

卷二刻成 以下續刻

定價金三十錢

此書ハ英國今代ノ大家ヘンリー、メンニング、マクレオッド氏ノ原著「エコノミックス」フホアー、ピギンナー「即チ財理學初步ヲ譯述セル者ニシテ議論繁雜ニ過キズ又簡單ニ失セズ殊ニ譯文ハ專ラ通俗ヲ旨トセルカ故ニ其深切ナルコト恰モ嚙ンテ合メルカ如シ初學者經濟學ノ何タルヲ知ラント欲スルニハ恐クハ此書ヲ措テ他ニ完全ノモノ多カラザルベシ田口卯吉先生ノ述スル所ノ經濟哲學ト云フ者ハ則チ麻氏ノ大財理學ナリ

後藤象次郎公 內務次官芳川顯正公序

伊國マキアゾエリー氏原著 杉本清胤先生譯

○經國策

完

石版 肖像入

定價金六十錢

本書ハ有名ナル伊太利國マキアゾエリー氏ノ原著ニシテ在昔伊國ノ佛蘭西、日耳曼、西班牙等諸強國ノ間ニ間マリ國歩艱難ノ時ニ際シ權謀術數ヲ逞フシ戰國縱橫ノ策ヲ運ラシ以テ其國ヲ維持經營スルノ方法ヲ説キ在上ノ人ニ指示セシ奇書ニシテ氏ハ古人ノ精粕ヲ嘗メス新一機軸ヲ出シテ所謂マキアゾエリー主義ヲ定メ議論縱橫立言深刻ナルハ實ニ芳川公ノ序文ニ云ヘル如ク玄ヲ鈞リ微ヲ發キ先賢未ダ言フ能ハサル所ノ若放言シ毫モ忌憚ナク良ニ泰西ノ韓非ト謂モ詛ザルモノニシテ又氏ノ著書多シ

ト雖ドモ其畢生心血ノ注グ所ハ是書ニアリテ今日東洋ニ在ルノ爲政家ハ勿論猶一己人平生酬接ノ際ト雖モ亦是書ヲ讀テ自ラ警ムル處ヲ知ラザル可カラサルハ眞ニ後藤公ノ論セラル、ガ如シ杉本清胤君嘗テ是書ノ世ニ補益スルコト少カラザルヲ以テ之ヲ譯述セラル今弊社請テ是ヲ世ニ公ニス乞フ大方ノ諸君子幸ニ一覽ヲ賜ランコトヲ遠藤孝一先生著

THE GENTLEMAN'S MODEL LETTER-WRITER.

○英語尺牘例題

完

定價金參拾錢

近來英語作文書類ノ梓ニ上ル者日一日ヨリモ多シト雖モ大概ハ歐米出版ノ作文書ヲ其儘ニ翻譯セルモノカ或ハ是ニ一通リノ直譯ヲ附セル者ニシテ眞ニ我國人士習文ノ軌範トナスニ足ルモノナシ此書ハ嘗テ英國オックスフォールド大學ニ留學スルコト數年ノ久シキニ至リ其間日々該國知名ノ學士ト來往シ深ク上流社會ノ交際法ニ通曉セラレタル遠藤孝一先生ノ著ニ係リ載スル所ハ居家日常ノ往復文章ニシテ紳士貴女間ニ必用欠クベカラザル者ハ冠婚葬祭ノ挨拶狀饗宴夜會ノ案内狀ヨリ商賈取引ノ諸文例ニ至ル迄悉皆網羅シテ遺ス所ナシ殊ニ章中ニハ多ク日本ノ地名事項ヲ挿ミタル等万事學者堂ニ昇ル便チ圖レリ今ヤ内地雜居ノ實行近キニアラントスルノ秋ニ際シ最モ

必要ノ豫備ハ何ナリヤト問ハ、蓋シ英語英文ヲ修ムルヨリ急ナルハナカルヘシ而シテ英語ヲ修ムルニハ即チ他書ノ完備ナル者アラソ英文ニ至テハ恐クハ此書ニ比肩スベキ者鮮ナカルベシ江湖英學ニ熱心ノ諸君子乞フ一本ヲ購覽シテ其實用ヲ試ミ玉ハソコトナ

法學士山田喜之助先生譯註

○麟氏英國會社法

洋裝美本 全一冊

定價金壹圓參拾錢

右ハ法律ノ學ヲ實際ニ應用セント欲シ積年ノ苦テ大學ニ積ミ才學ヲ以テ其名ヲ法學士中ニ得タル山田先生ノ譯本ニ係リ實ニ法學博士リントレノ氏ノ組合法及ヒ會社法ヲ基トシ他ノ善書ヲ纂譯補註セシモノナレハ組合法會社法ノ精粹ヲ集メタルモノト謂フヘク其ノ法學ニ切ナル多辯ヲ要セサル者ナリ

中江篤介先生著

○理學鈞玄

洋裝美本 全一冊

定價金壹圓

泰西哲學ノ今日ニ必要ナルコトハ復タ論辨スル事ヲ須ス然ルニ哲學ノ物タル流派極メテ多ク或ハ神德ヲ頌揚スルアリ或ハ神ヲ以テ有ルコト無シト爲スアリ其他諸說相容レズ是ヲ以テ單ニ一派ヲ講習スル時ハ終ニ掛漏ヲ免カレス本書ハ諸派ヲ網羅シテ遺ス

コナク所謂簡ニシテ且ツ盡ス者ナリ江湖ノ君子一讀シテ是言ノ虛ナラサルヲ知ラン三州長英先生題字長春園廣瀨貞恒先生遺著

○小説帶木

全五冊

一冊ニ付改正定價金參拾錢 第三冊出版

此書ハ文政年間豐後日田郡ニ於テ咸宜園ナル一大義塾ヲ開キ廣ク諸生ヲ教授シテ博學ノ聞ヘ高ク最モ詩ノ道ニ精シク門下常ニ俊英ノ士ニ饒ナルヲ以テ雷名ヲ天下ニ轟シタル廣瀨淡窓先生ノ父君長春園先生カ深ク時勢ニ慨スル所アリテ起草シタルモノニ係リ事實ヲ天正年間ノ一奇談ニ藉テ數十年來物ニ觸レ事ニ感シ先生ノ腦裏ニ鬱積シタル萬般ノ事或ハ不平ニ堪ヘザル者或ハ驚喜ヲ極メタル者ヲ英雄豪傑才子佳人ノ言行中ニ顯出シタル者ニシテ其趣向ハ和ヲ出テ漢ニ入り更ニ頗ル西洋ノ小説ニ似タル所アリ實ニ我日本ニ在アハ古來今往稀ニ見ル所ノ珍書ナリ曩ニ第一冊第二冊ハ刷行シテ大ニ世ニ行レタリト雖モ版元ノ書肆他事ニ耽テ其業ヲ果サズ今般弊社ニ於テ其原稿并ニ在本ヲ讓受ク茲ニ第三冊ヲ出版スル事ヲ得タリ第四冊第五冊モ續テ開版シ兩三月ヲ期シテ必ラス大成ノ功ヲ奏スベシ續々御購求アラソコトナフ

狷堂久松義典君著
矢野文雄君序尾崎行雄森田文藏諸君評

NEW POLITICAL NOVEL

代議 政談

月雪花

上等西洋綴 石版密書入

定價金七十錢

月ハ長空ニ懸リテ清光千里、雪ハ鵝毛ニ似テ玉九陌ヲ鑠メ、花ハ暖風ニ笑ヒテ紅紫爛爛、此三景ヲ移シテ以テ政治社會ノ現象ニ比ス可ク以テ英雄俊傑ノ事業ニ擬ス可ク風韻瀟灑ノ趣、氣骨稜々ノ態皆以テ之ヨリ表現ス可シ本書ハ國會議院ノ諸制度ヲ綱領トシ之ヨリ生スヘキ百般ノ政治現象ヲ網羅シテ之ヲ平易婉曲ナル小説ニ編述シ且英、法、白、米、瑞、蘭、葡、澳、匈、伊、希諸邦現行ノ典例ハ精細ニ取調ヘテ之ヲ本邦ノ實際ニ應用スルノ私提案ヲ立テ議院ノ組織、撰擧ノ資格ヨリ代議士ノ人員特權等諸般ノ制度ニ至ルマテ大小精粗舉ケテ洩スコトク雪月花三景ニ擬シタル三英傑カ互ニ異種ノ施政主義ヲ執リテ政治社會ト國會議場トニ馳騁角逐セル情態ヲ模寫シ其間學士ノ政談賢媛ノ善行、議員撰擧ノ激争候補者ノ雄辨、邪黨ノ陰謀、財產家ノ肉情、才子佳人ノ情交、志士烈士ノ慷慨等ノ美談ヨリ國會議事堂ノ構造議場發言ノ模様、政治新聞ノ大勢力、集會演說ノ實益及ヒ政黨政社カ後來ニ於テ活潑機敏ノ運動ヲ逞フスルキ態萬狀ノ現象ヲ敘述シ其事蹟ハ歐米各邦ノ政史ヨリ推想シテ之ヲ實際ニ轉用シ專ラ架空ニ趨ラサルヲ務メ親切ニ愛國志士カ參考ニ供センコト期シタル一種新奇ノ政治小説ナリ

- 文明東漸史 全一冊 藤田茂吉君著 定價金壹圓三十八錢
- 聚思談 前編一冊 藤田茂吉君著 尾崎庸夫兩君合譯定價金壹圓三十五錢

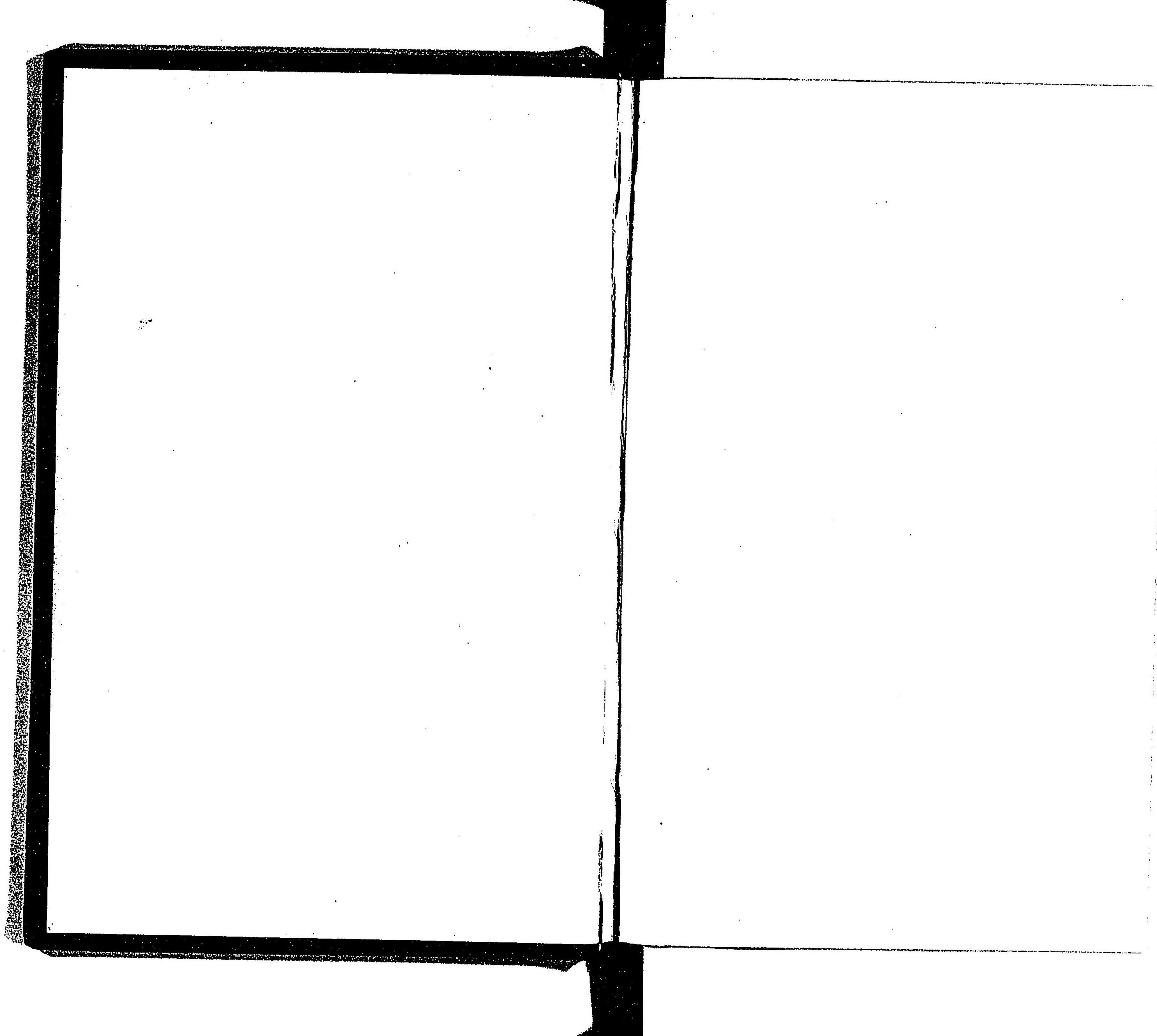
- 英國議院政治總論 合卷 尾崎行雄君譯 賣價金貳拾錢
- 英國制度沿革史 合卷 尾崎行雄君譯 賣價金貳拾錢
- 英國王權政府諸會議篇 合卷 尾崎行雄君譯 賣價金貳拾錢
- 英國議院政府樞密院篇 合卷 尾崎行雄君譯 賣價金貳拾錢
- 英國內閣執政篇 全一冊 同 同 金七十貳錢五厘
- 英國王權篇一 一冊 同 同 金五十五錢
- 英國王權篇二 一冊 同 同 金七十八錢
- 尙武論 全一冊 同 同 金三十錢
- 通俗地租改正私議 全一冊 同 同 金貳十錢
- 社會進化論 全一冊 有賀長雄君著 同 金一圓貳十八錢
- 宗教進化論 全一冊 同 同 金一圓三十貳錢
- 族制進化論 全一冊 同 同 金八十錢
- 貨幣新論 全一冊 高田早苗君著 同 金一圓貳十錢
- 該撒奇談 全一冊 坪内雄藏君譯 同 金一圓
- 英米契約法 上冊出版 砂川雄峻君纂著 同 金八十錢
- 民法之骨 上冊出版 故小野梓君著 同 金六十四錢

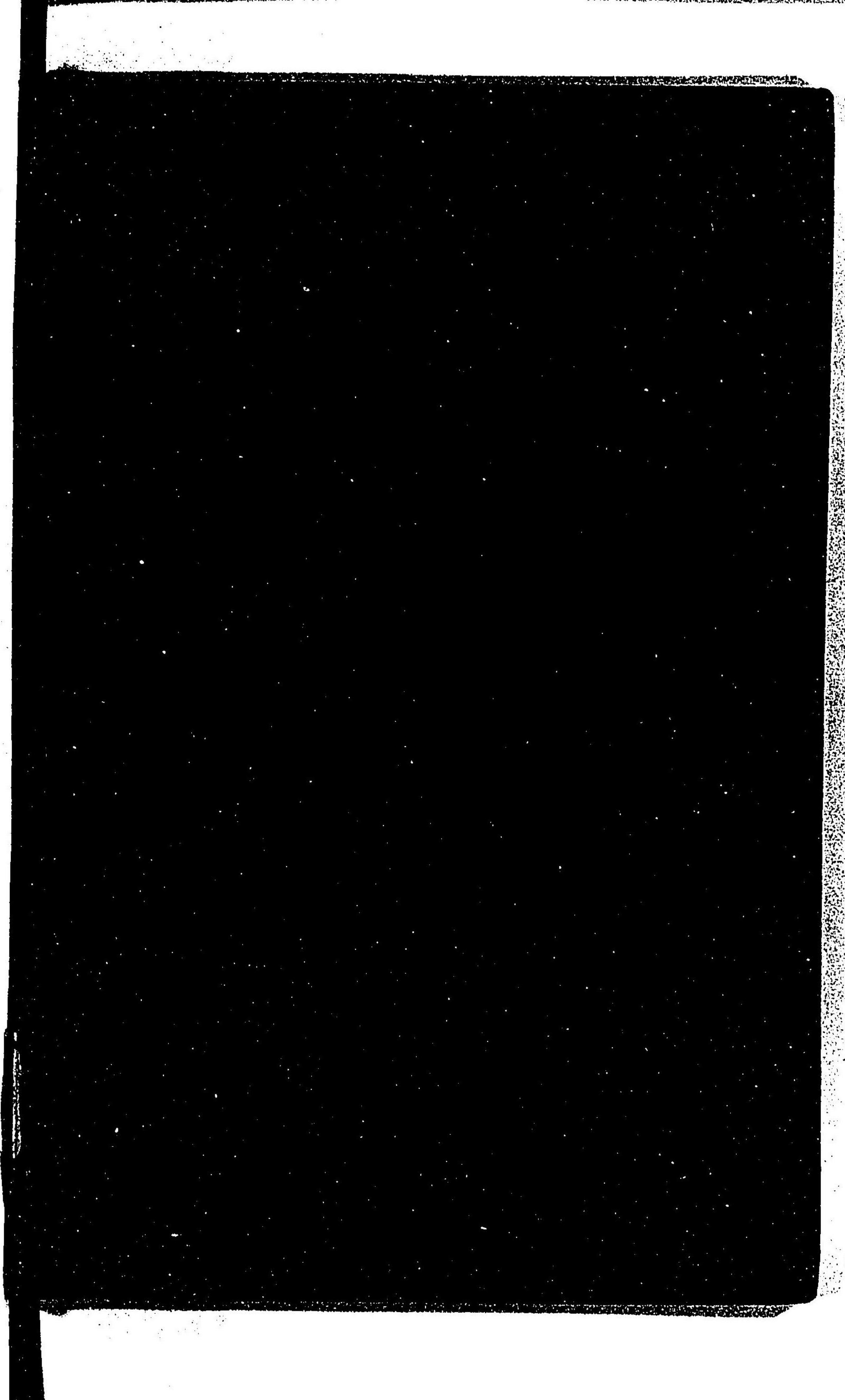
4T133

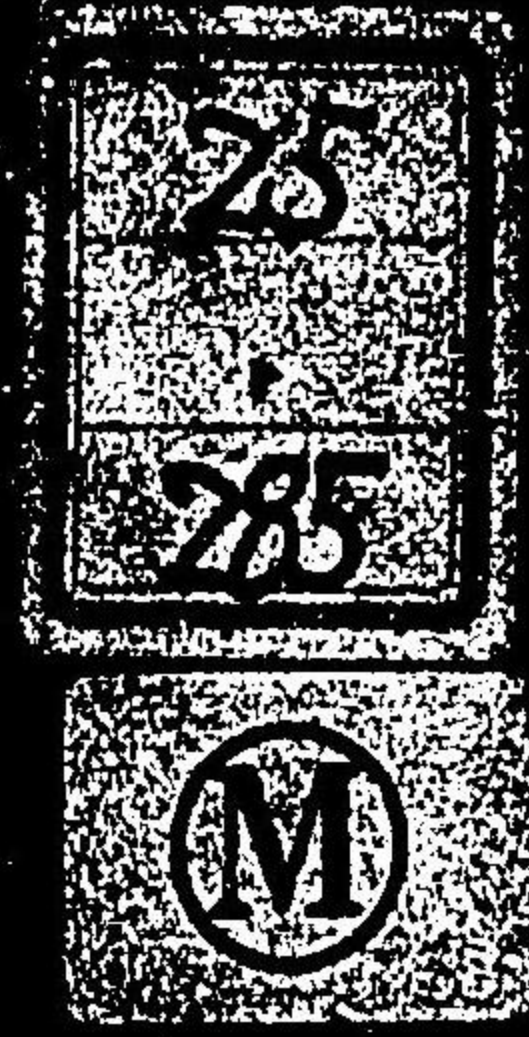
- 東洋論策 第一冊 同 金三十貳錢
- 哲學字彙 全一冊 井上哲二郎君 同 金六十錢
- 齋武經國美談 全一冊 有賀長雄君 同 金六十錢
- 名士經國美談 全一冊 矢野文雄君 定價金九十五錢
- 日本文體文字新論 全一冊 纂譯補述
- 獨和字典大全 全一冊 矢野文雄君著 同 金八十五錢
- 周遊雜誌 全一冊 小栗栖香平君纂譯 同 金七圓
- 染色術摘要 全一冊 矢野文雄君著 同 金九十五錢
- 論理指鍼 全五冊 平賀義美君著 正價三圓五十錢
- 國語會舌戰必勝 全三冊 千頭清臣君著 三冊二テ 定價八十五錢
- 國語會舌戰必勝 全一冊 千頭清臣君著 定價金三十五錢

十四

集成社發兌書目終







205206-000-7

25-285

神仙叢話

桐南居士(管子法) / 訳

M20

EDV-0233



